

從六位判事 中尾君序
西備戶田十畝編纂

現
身代限躰解

明治十八年五月刊行

法網細密而後才點智
往、有免其罪者也家
資分散之際最為多矣
現身代位法解行于
民百乃知權利者可以

在失其極則不仁可以
愆負者也哉勢也知以
法律之不可免而裁可
以危其勢也人有仁
義之心不始讀此書

中後拾



凡例

一 我邦未ダ民法商法訴訟法ノ制定ナキヲ以テ倒産分散ノ法實ニ完備セス只ダ明治五年司法省第九號ノ布達アリ而シテ明治五年第百八十七號布告明治六年第八十八號布告ヲ標準トシテ其他ノ法律及ヒ令訓ノ如キニ參酌シ實施セラル、トトセラレタリ故ニ會社ノ倒産一已人ノ分散等ノ區別ノアルコトナク只ダ一様ニ身代限トシテ同一ノ取扱ヲ爲スコトセラレタルハ抑モ又ダ未完ノモノナリト云フベシ然ルニ身代限ノ法タルヤ右ニ述ル如ク制定律ノ頒布ナキノミナラズ未ダ之レヲ聚集蒐輯セシ一部ヲ爲シタル書アルヲ見ズ編者憾ヲ茲ニ措ク久矣頃日閑アル毎ニ筆ヲ採リ漸ク以テ一部ノ書ヲ成スコトヲ得タリ然レドモ識者ガ未完ノ書ナリト批評セラルベキハ編者

豫メ期スル所ナリ

一 成文ノ法律至テ少ナク之レヲ補フベキ告達ノ類モ多カラズ令訓ノ如キハ抄シトスベカラザルモ概シテ言フトキハ是等ヲノミニテ完備セリトノ解明ヲ下スヲ能ハズ依テ編者ハ成ルベク編者ノ意見ヲ以テ章節ヲ解釋セントスレドモ如何セン完キ解釋ヲ下スノ便ヲ得ル能ハズ實ニ何分ヲ補フノミ

一 書中法文又ハ令訓ノ下ニ「第何解」又ハ「第何乃至第何解」トアルハ編者ガ其ノ法文ヲ解明シタル部分ニシテ「本編解」「本章解」ナドアルハ其ノ編其章其節其款ノ編纂眼目ヲ示シ「第何章餘解」ナドアルハ其ノ章其節其款ニ就テ法律令訓等ノ完備セザルモノニ對シ編者ガ編者ノ意見ヲ示シタルモノナリ

一 又タ「編者白」トアルハ略文再出等ノ如キモノ、説明ヲナスモノ

ニテ「参考」トアルハ其ノ本文ノ参考トナルベキ法律令訓等ヲ引用シタルモノナリ尙ホ欄外ニ其ノ法文ノ改正ニカ、ル年號ト告達ノ號數トヲ掲グルモノアリ

一 第一編ハ即チ通常ノ身代限ニシテ本書ノ眼目ナルユヘ凡ソ有ルモノハ載セテ漏サレルナレドモ第三編租稅不納者處分ニ至リテハ本書ノ眼目ニアラザルユヘ務メテ之レヲ略シ只々缺ク可カラザル要典ノミヲ載ス蓋シ第三編ハ實ニ本書ノ附録トモ云フベキモノナレバナリ

明治十八年四月上澁玉浦ノ僑居ニ識ス 戸田十畝

現行身代限法解

目次

第一編 通常身代限	一
第一章 總則	一
第二章 差押物件	五
第一節 差押ヲ可カラサル物件	五
第二節 共有物件	八
第三節 小作及作物	一六
第四節 地所家屋船舶	一九
第五節 印紙類	二七
第六節 佗人ノ貸附ノ財産又ハ佗人ノ財産	三〇
第七節 戶主身代限ノ時非戶主ノ財産	三七

第八節	非戸主身代限ノ時戸主ノ財産	四四
第九節	連帶義務	四七
第十節	請入証人辨償及ヒ代償	五〇
附節第一	公証猶豫及財産差押	五五
附節第二	代理者	六三
第三章	入札糶賣	六六
第一節	郡區戸長ノ取扱	六六
第二節	原被立會及立會ヲ拒ミタル時	七二
第三節	揭示	八一
第四節	入札及評價	八三
第五節	地券書換	九〇
第四章	先取特權及賠償追徴	九一

第一節	先取特權ヲ有スル條件	九一
第一款	租稅區町村費	九一
第二款	雜	九四
第二節	裁判費用及訴訟入費	一〇〇
第一款	民事ニ關スルモノ	一〇〇
第二款	刑事ニ關スルモノ	一一二
第三節	利息計算	一一七
第四節	賠償及追徴	一二三
第一款	通則	一二三
第二款	損害要償	一二九
第三款	贓物返還	一三一
第四款	贓金追徴	一三三

第五章 追訴	
第一節 追訴	一四三
第二節 追訴セズシテ効チ有スル者	一四九
第六章 僧侶及社寺身代限	一五〇
第七章 身代限者權利ノ欠闕	一五五
第一節 官吏	一五六
第二節 投票ヲ以テ撰舉セラル、者	一五七
第三節 學校教員生徒	一六〇
第四節 代理者	一六二
第八章 期滿得免ノ摘要	一六四
第一節 民事出訴期限	一六四
第二節 公訴附帶私訴ノ期滿免除	一七二

第一編 附錄 會社鎖店	一七四
第一節 銀行	一七五
第二節 株式取引所米商會所	一八四
○	
第二編 詐偽ノ分散	一八七
○	
第三編 租稅不納者處分	一九五
第一章 通則	一九六
第二章 國稅ニ關スルモノ	二〇六
第一節 地所ニ關スルモノ	二〇九
第二節 雜	二二七
第三章 地方稅ニ關スルモノ	二二七

第四章 區町村費ニ關スルモノ 二三〇

第五章 租稅延納 二三二

第六章 租稅官吏カ犯則ヲ搜索ス 二三七

現行身代限法解

西備 戸田十畝 編纂

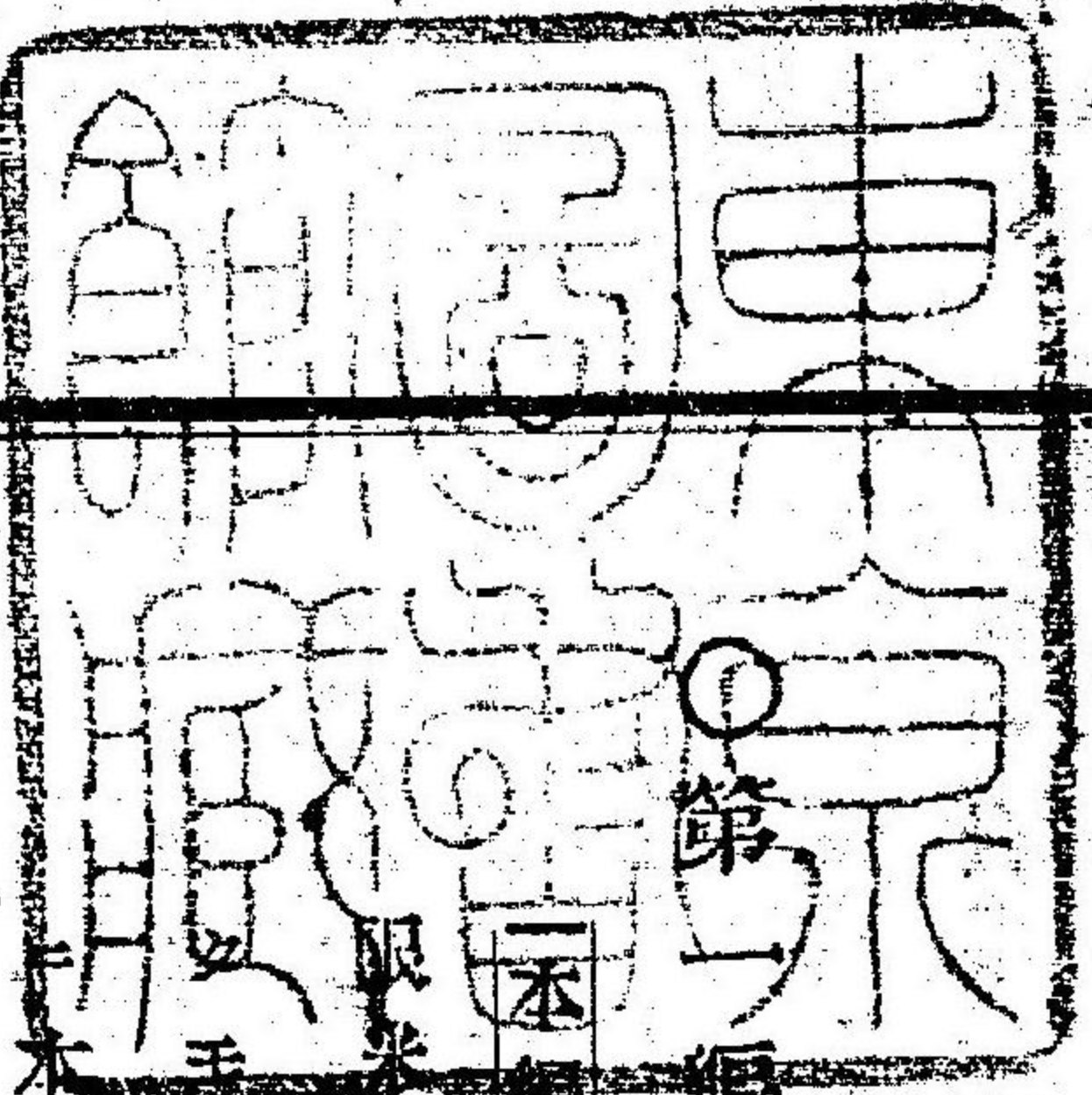
第一編 通常身代限

本編解 茲ニ通常身代限ナル一編ヲ設クルモノハ詐偽身代
 限ニ納稅處分等ニ對スルノ稱ニシテ本編ニ通常ノ文字ヲ置
 キ寺院僧侶ノ身代限會社鎖店等ハ皆ナ編中ニ輯メタリ故
 本編ハ本書中ノ主要ニシテ第二編以下ニ於ケルモ多クハ

本編ヲ參照引用スヘキモノナリトス

第一章 惣則

本章解 我邦身代限ニ關スル法律モ隨分ナキニハ非ザレ
 ドモ茲ニ惣則トモ爲スヘキモノ甚ダ少シ多クハ第二章中



ニ載スベキモノドモナリ依テ編者ハ左ニ二三ノ総則トス
ベキモノヲ載スルノミ

〔第一〕 明治六年八月廿三日第三百六號布告

動産不動産書入金穀貸借規則左之通相定候條此旨布告候事

動産不動産書入金穀貸借規則

一 動産不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シ右期限中書入ノ動産不動産
流亡又ハ燒失ヲ爲スト雖ヒ負債ハ身代限濟方可申付事
一 動産不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借シ濟方ノ期ニ臨ミ右書入ノ動産
不動産ノ相場高下アリテ糶賣ノ價ヒ負債ノ高ヨリ餘分アル時ハ其
餘分ハ借主ヘ與フヘシ若シ其價ヒ負債ヨリ不足ナレハ身代限濟方
可申付事

一 壬申第三百號布告以前家祿ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シタル分ハ家

祿ヲ除キ外物品ヲ以テ身代限濟方可申付事

〔第二〕 明治五年九月十三日司法省第九號布達

凡動産不動産取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告雙方ノ内一方之者負
公事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限リ申
付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相
決直ニ濟方不相成候時ハ身代限之方法ヲ執行可致候事

〔第一第二解〕 此ノ法律ニ動産不動産ノ書入又ハ動産不動産ノ取
引トアレドモ這ハ全ク信用無抵當ノ貸借モ含ミアルモノナリト
解スルヲ得ベシ惟テ金穀貸借質入ハ別ニ法律アリノ約條期限ニ
至リ負債主ニ於テ其返金ノ義務ヲ盡サ、ル時ハ之レヲ裁判所ニ
訴ヘ出テ果シ負債主敗訴ノ言渡ヲ受ケタル時ハ執行期限即チ裁
判言渡ヨリ六十日内ニ返金スレバ免モ角モナレドモ其期ヲ過ル

トキハ裁判所ニ於テハ直チニ身代限ノ處分ヲ爲スモノナリ管ニ
 金穀貸借ノミナラズ他ノ金穀取引ニモ亦タ此ノ法ヲ施スモノト
 ス又タ書入ノ動産不動産ガ期限内ト雖モ流失シ燒亡スル等ノ如
 キコアルトキハ直チニ之レニ對シ代ル動産不動産ヲ差入ルハ
 勿論ノコナレドモ之レヲ爲ス能ハザルカ負債ヲ返濟スル能ハザ
 ルカノ時ニハ亦タ身代限ノ處分ニ遭フモノトス○動産不動産ヲ
 書入トナシ期限ニ至リ負債主返金ノ義務ヲ盡ス能ハザルトキハ
 其書入物件ヲ糶賣スルモノナリ其糶賣ノ相場即チ價ヒガ元利金
 ヲ超ヘタルトキハ超ヘタルメケノ金額ハ負債主ニ還付スル勿論
 ニテ若シ之レニ反シ不足スルトキハ其不足ニ對シテハ既ニ解ク
 所ノ手續ニヨリ身代限ノ處分ニ終ルモノナリ○**第一**ノ布告第
 三項ハ現行ニハ多ク用ナキモノナリ

○第二章 差押物件

本章解 本章ニハ身代限ニ際シ差押ユヘカラザル物件。差押
 フ可キ物件。財産差押ノ及ブ可キ人。公証猶豫ノ如何等ヲ節ニ
 分チテ掲載セリ

○第一節 差押フ可カラザル物件

第三 明治五年六月廿三日第百八十七號布告ノ内
 今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相達候事
 但當于申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服着替共

男女共

各ニ通宛

一夜具 男女共 各一通宛

一人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等

其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸

主借主ヨリ鑑定ノ者ノ道具屋 一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致

サセ町役人ニ於テ総入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムベキ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用ヰル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合

麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事

一鍋釜及炊具

各一通

【編者曰】此ノ所ニ華士族身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品

類ヲ載セラレタレドモ畧ス

一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分

ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

【第三解】此ノ布告拔萃ニハ別ニ解明スベキ程ノ事モアラザルナ

リ右引殘ス品類ノ内ナル本人ノ職業ヲ爲スニ必要ナルモノハ入

札法ハ第三章ヲ參照スベシ

【第一節餘解】地所ノ賣買ノ如キ戸長ノ公証ヲ受ケタルカラハ既

ニ契約ノ成立チタルモノナルユヘ身代限處分ノ前ニ其ノ契約成

立シタルトキハ假令地券ノ書換ヲ終ラザルトモ賣主身代限ノ糶

賣部中ニハ加フベキモノニアラズ去リナガラ詐偽ノ手段ヲ以テ

ノ所爲ナル時ハ刑法第三百八十八條(第二編ヲ見ヨ)ニテ罰スルノ

明文モアルユヘ賣買ノ効チ有スルヲ限リニハ非ザルナリ
又々賞牌勳章從軍記章金銀本盃ノ如キハ普通財産ト異ナルモノ
ナレバ之レヲ拜受スル者ノ子孫ニ在テモ身代限糶賣ノ財産中ニ
ハ加フベキモノニ非ザルヤ必セリ

○第二節 共有物件

【第四】明治九年十月十七日第三百三十號布告

各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則自今左之通相定候條此旨
布告候事

第一條 凡一區ニ於テ金穀ヲ公借シ若クハ共有ノ地所建物等ヲ賣買
スルハ正副區戸長並ニ其區内毎町村ノ總代二名ツ、ノ内六分以上
之ニ連印スルヲ要スヘシ

第二條 凡ソ町村ニ於テ金穀ヲ公借シ若クハ共有ノ地所建物等ヲ賣
買スル時ハ正副區戸長並ニ其町村内不動産所有ノ者六分以上之ニ
連印スルヲ要スヘシ

但右不動産所有者ヨリ其總代ヲ撰ンテ之ガ代理ヲシムルハ其
都合ニ任スヘシ

第三條 凡ソ區内若クハ町村内ニテ土木ヲ起功スル時ハ其區ト町村
ナルトニ隨ヒ各第一條若クハ第二條ニ倣フヘシ

第四條 若シ第一條第二條及ヒ第三條ニ指示セル場合ニ於テ唯正副
區戸長ノ印ノミヲ鈐シ其須要ナル連印ヲキモノハ總テ之ヲ該區戸
長限リノ私借若クハ私ノ土木起功ト看做スヘシ其正副區戸長ノ印
ノミヲ以テ共有ノ地所建物等ヲ賣買シタル者ハ總テ賣買ノ効チ有
セス

〔第五〕明治十二年六月廿四日第二十二號布告

區會町村會ヲ開設スル地方ニ於テハ明治九年十月第三百三十號布告金穀公借共有物取扱土木起功ノ事項ハ總テ該會議ニ付シ施行スヘシ此旨布告候事

〔第四第五解〕此ノ布告ハ共ニ身代限ニ關係ナキモノ、如シト雖

モ〔第六〕以下ノ參考ニ供スル爲メ茲ニ載セタルナリ

〔第六〕明治十六年七月九日千葉縣ヨリ司法省ヘ伺

凡ソ一村又ハ一部落若クハ數人共有ノ物件ハ各自財産ニ算入スヘカラサルヲ以テ其一人身代限ノ場合ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニ無之右相伺候條速ニ御指令有之度候也

○指令 十六年七月十九日

伺之趣一村又ハ一部落ノ公有スル物件ハ其村内若クハ部内ノ一人身代限處分ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニアラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツ可ラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトス

〔第七〕明治十六年八月三日千葉縣ヨリ司法省ヘ伺

身代限財産取調ノ際共有物件差押方ノ儀客月九日相伺同十九日御指令相成候處右ハ數人ノ共有ニシテ其分ツ可ラサル物件ハ全部ヲ公賣ニ付シ其代價ハ共有者ニ分割シ身代限ヲ爲ス者ノ分ノミ其債主ヘノ配當金ニ加フルハ勿論ナルヘシト雖モ若シ他ノ共有者ヨリ其物件代價ノ一部即身代限ヲ爲ス者ノ分ヲ辨納スルニ於テハ固ヨリ公賣ニ付スルニ及ハサル儀ト存候得共爲念相伺候條至急御指令相成度候也
○指令 十六年八月廿日
伺之通

〔第八〕明治十六年八月十一日福井縣ヨリ司法省へ伺

官報第十九號ニ掲載有之千葉縣ヨリ身代限財産取調之際共有物件差押方ノ儀ニ付御省へ稟請候處其御指令ニ曰ク一村又ハ一部落ノ公有スル物件ハ其村内若クハ部内ノ一人身代限處分ニ遭フモ之ヲ差押フ可キ限ニアラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツ可カラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトスト有之右御指令ノ旨意ハ公有ト私有トヲ大別サレタル儀ニテ假令分別シ得ル物件ト雖モ一村若クハ一部落ノ公有タル上ハ差押ユルヲ得ス亦假令分別シ能ハサル物件ト雖モ私有タル上ハ可差押旨ヲ示サレタル儀ニ候哉聊カ疑似ニ涉リ候間否仰御指揮候也

○指令 十六年八月三十一日

伺之通

〔第九〕明治十六年十月三十日山梨縣ヨリ司法省へ伺

官報第十九號伺指令ノ欄内千葉縣ノ伺ニ對シ御省ノ御指令ニ一村又ハ一部落ノ公有物件ハ其村内若クハ部内ノ一人身代限ノ處分ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニ非ラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツ可ラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトスト有之候處右ハ今般右御指令ニ依リ取扱可然哉

○指令 十六年十一月二十一日

伺之通

〔第十〕明治十七年三月十一日福嶋縣ヨリ司法省へ伺之内

第一條 官報第四十四號ヲ閱スルニ明治十六年八月一日千葉縣ヨリ身代限財産取調之際(中)數人共有ニシテ分ツ可ラサル物件ハ(中)它ノ共有者ヨリ其物件代價ノ一部即身代限ヲ爲ス者ノ分辦納スル

ニ於テハ公賣ニ付スルニ及ハサル義ト存候云々伺へ同年同月二十日伺之通ト御指令相成抑モ公賣ニ付スルニ不及トハ如何ナル手續ヲ以物件代價ヲ相定候趣旨ニ可有之哉凡物品代價至當ノ價額ヲ得ント欲スルニハ公賣ト評價ノ二途ニアルナラン果シテ然ラハ御指令ノ趣旨ハ自然評價爲致義ニ可有之哉

○指令 十七年四月二日

伺ノ趣ハ左ノ通り

第一條 共有者辨納申立ノ代價ニ對シ原被告異議アルニ於テハ評價セシムヘキモノトス

第六乃至第十條 今此ノ五件ノ伺指令ニ對シ編者ハ之レヲ三項ニ分チ左ニ解明セントス

第一 一村又ハ一部落ノ共有物ハ公ケノ共有物ナリ故ニ其村其

部落ノ一人身代限ニ遭フモ分ツ可キ物件ト分ツ可ラサル物件トヲ論セス身代限ノ物件中ニハ加フ可カラザルモノトス

第二 數人ノ共有物ハ私ノ共有物ナルヲ以テ其共有者中ノ一人身代限ニ遭フタルトキ分ツ可キ物件ナラバ其一人分ヲ取除ク勿論ナリト雖モ分ツ可カラザル共有物件ナルトキハ之レヲ差押ヘ公賣ニ付シテ其價ヲ數人ニ分頭シ一人ニ當ル分ヲ身代限配分金ニ加フベキモノトス

第三 數人共有ノ分ツ可カラザル物件ヲ差押ヘタル時ニ當リ他人ヨリ其一部即チ身代限ニ遭フ者ニ相當スル價格ヲ辨納セントセバ公賣ニ付スルニ及ハサルナリ其價格ヲ定ムルハ代辨者ノ申立ニ依ル可シト雖モ若シ其申立ニ對シ原告又ハ被告ノ中ニ異議ヲ唱フル者アルトキハ双方ヨリ鑑定人ヲ出シテ評價セシメ決定

○第三節 小作及作物

〔第十一〕 明治十六年十二月廿六日大坂府ヨリ司法省へ伺ノ内

第一條 負債主身代限ニ際シ他人ノ田地ヲ小作スルモノアリ元來小作米ハ其土地作徳ノ幾分ヲ以テ地主ニ納ムルノ習慣ニシテ尋常貸借トハ自カラ性質ヲ異ニスルニ當リ右身代限ノ節其地ノ立毛ハ先一番ニ地主ニ納ムヘキ小作米金ヲ見積ヲ以テ引去リ然ル后其餘分ヲ身代限財產點數ニ付立可然哉

第二條 前條財產付立前之ヲ引去ルヘカラサルモノトスルモ負債主財產公賣金ノ内右立毛ニ對シテハ地主ニ於テ特ニ先取ノ權ヲ有シ候哉

○指令 十七年五月十日

書面伺ノ趣左ノ通可心得事

第一條 小作地ノ作物ハ身代限處分上之ヲ公賣スヘキ時期迄ニ成熟スヘキ者ニアラサレハ差押フ可カラス又地主へ納ムヘキ小作米金ヲ見積ヲ以テ引去ルヘキモノニアラス

第二條 地主ハ作物ニ對シ先取權ヲ有スルモノトス

〔第十二〕 明治十七年七月廿六日静岡縣ヨリ司法省へ伺

第一條 身代限地所公賣ノ際之ニ成立スル所ノ作物ニシテ其既ニ成熟スルモノハ地所ト各別ニ公賣スヘキ儀ニ候哉

第二條 前條若シ未成熟ナルモノハ地所ヲ公賣スレハ隨テ作物ハ之ニ附帶スヘキ儀ニ候哉

○指令 十七年八月十三日

伺ノ趣ハ左ノ通

第一條 別段ノ例規無之ニ付適宜處分スヘキモノトス

第二條 公賣スヘキ時期迄ニ成熟スヘキ作物ニアラサレハ差押フヘキモノニ非ス

第十一 第十二 解 今此ノ二件ノ伺指令ニ對シ編者ハ之ヲ三項ニ

分チ左ニ解明セントス

第一 耕地小作人カ小作スル所ノ其ノ作物ハ小作人身代限ノ處分ヲ受ケ公賣ニ至ル迄ニ成熟シタルモノハ取押フヘキモ公賣後

ニ成熟スヘキモノハ差押フヘキモノニ非ズトス

第二 前項ノ場合ニ於テ作物ヲ公賣スヘキ時ニハ其ノ公賣金ノ内ヲ以テ地主ハ小作米金ノ先取權ヲ有スルモノナリ(本項即チ第十一ノ伺指令ハ第四章中ノ先取權ヲ有スル節ニ通用ス)

第三 身代限ニ遭フタル者ノ所有地所ヲ公賣スルニ當リ其ノ地所ニ成熟スル作物ニシテ公賣迄ニ熟スルモノハ之ヲ地所ト各別ニ公賣スルモ共ニ公賣スルモ適宜ノモノナリトス若シ公賣迄ニ成熟セザル作物ナルトキハ地所ニ所屬スヘキモノナリ

○第四節 地所家屋船舶

第十三 明治七年一月十九日第六號布告

明治六年一月第十八號布告地所質入書入規則第九條左之通改正候條此旨布告候事

第九條 質入又ハ書入証文ニハ必ス其町村戸長ノ與書証印ヲ取ルヘシ其村町戸長ノ役場ニハ與書割印帳ヲ備ヘ置キ証文ノ與書証印ヲ願出ル時ハ帳面ト証文トニ番號ヲ朱書シ割印ヲ押シ與書ヲ爲ス可

シ若シ奥書並ニ割印ナキ証文ハ質入又ハ書入ノ証據ニハ不相成ニ付右証文ヲ以テ訴出ルニ於テハ負債主財産分散ノ時債主他ノ債主ニ對シ先キ取りノ特權ヲ失ヒ獨リ質入又ハ書入ナキ金穀貸借ノ處分ヲ可受事

但戶長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戶長與書調印ス可シ

第十四 明治七年五月十二日第五十二號布告ノ内

明治六年(一月)第十八號布告地所質入書入規則中第十條第十二條左ノ通改正候條此旨布告候事

第十條 一箇所ノ地ヲ二重三重ニ書入候儀ハ不相成候得共若シ第一番ノ金主ヘ引當ニ入レ置キ候事ヲ第二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分ヲ見込又其地所ヲ引當ニ借添ヘ致シ候儀ハ不苦尤借主身代限ノ處分ニ相成候節ハ右地所糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ者ヘ

元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡申スヘク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足ノ分ヲ償フヘ並ニ第三番以下ノ金主ニ償フヘ平常引當ナキ債主ニ身代限償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡可申事但第二番ノ金主ヘ受取候証文ヘハ地所代價ノ餘分ヲ見込借添候旨ヲ書載可申事

第十五 明治八年九月三十日第四百十八號布告ノ内

第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三重ニ書入質ト爲スヘハ嚴禁ナレトモ若シ第一番ノ金主ヘ書入質ト爲シタルヘテ第二番ノ金主承諾ナレハ建物代價ノ餘分ヲ見込又其建物ヲ書入質ニ借添ト爲スヘテ得

へシ尤借主身代限ノ處分ニ至ルキハ右建物糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡スへク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主へ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主へ引渡スへキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足ノ分ヲ償フハ平常書入質ナキ貸主ニ身代限ノ償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡スへシ

但第二番ノ金主ニ渡シ置ク書入質ノ証文ニハ建物代價ノ餘分ヲ見込ニ借添タル旨ヲ書載スへシ

第十六 明治八年四月十日第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ証書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ

地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルへキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加へ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スへク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

第十三乃至第十六解 此ノ四法律ハ先取特權ニ關係ノ大ナルモノナルユへ第四章ナル其節ニ於テ説解スへシ

第十七 明治七年五月十二日第五十二號布告ノ内

明治六年(一月)第十八號布告地所質入書入規則中第十條第十二條左ノ通改正候條此旨布告候事

第十二條 質入年季中天災ニテ地所流亡等其地ノ全形ヲ失フニ至ル時ハ地券ハ消滅スル理ニ付貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ品ヲ

代リ質ニ差入サセ証文書替ヲ求ムルヲ得ヘシ若シ代リ質ニ差入ルヘキ地所物品等コレナキハ訴訟ノ末身代限リノ處分ニ及フヘク又池成野地成等ニ變換シ或ハ闕崩等ノタメ其地ノ幾分ヲ失フキハ變換ノ模様及殘存ノ大小ニ應シ規則ニ基キテ地券書換願出ヘキ儀ニ付若シ其變換殘存ノ地ハ貸金穀高ノ償ヲナスニ足ラサルト見込場合ニ於テハ貸主ヨリ債主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ增質ニ差入サセ証文書替ヲ求ムルヲ得可シ若シ增質ニ差入ヘキ地所物品等無之時ハコレ亦訴訟ノ末身代限ノ處分ニ及フベキ事

但貸主債主相對示談ハ格別ノ事

第十八 明治八年九月三十日第四百四十八號布告ノ内

諸建物書入質規則並ニ賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條來ル十二月一日ヨリ施行可致此旨布告候事

建物書入質規則

第十四條 書入質ノ建物燒失流亡等ニ至リシキハ貸主ヨリ借主ニ對シ代リ質ヲ受取ルヲ求メテ爲スヲ得ヘシ若シ借主代リ質ヲ出スヲ肯ハス又ハ出シ能ハサルハ借用金穀返濟期限未滿内ト雖モ貸主ヨリ借主ニ對シ元利返濟ヲ求ルノ訴ヲ爲スヲ得ヘシ

第十九 明治十年三月八日第二十八號布告

人民所有ノ船舶ヲ賣買シ又ハ金穀等借用ノ爲メ書入質トナサントスル時ハ明治八年(九月)第四百四十八號布告諸建物書入質及賣買讓渡規則ニ準據シ賣主又ハ書入主ヨリ其船ノ圖面ト約定證書ニ本船管轄地戶長ノ公証ヲ受クヘシ若シ右ノ手續ヲ爲サ、ルニ於テハ其約定証文ハ裁判上尋常金穀貸借証書ト見做スヘシ

但從前書入質ト爲シタル分ハ明治十年六月三十日迄ニ本文ノ手續

ヲ以テ更ニ約定書改正可致尤航海中或ハ不得止事故アリテ右期日
マテニ書換難致者ハ其旨豫メ本船管轄地戸長役所ニ届置クヘシ
右布告候事

第十七乃至第十九解 今編者ハ此ノ法律ヲ左ニ四項ニ分チ説明セ
ントス

第一 質入書入ト爲シタル地所又ハ書入ト爲シタル建物船舶等
其ノ返濟期限未滿内ニ燒失流亡其他天變地異ノタメ其全形ヲ失
フタルトキハ地券ハ消滅シ免狀檢査証書ハ無効ニ販シ住居ヲモ
失フモノナルユヘ債主ヨリ負債主ヘ對シ直チニ代リノ質又ハ抵
當ヲ差入レサシメ証書ノ書替ヲ爲サシムルノ權ヲ有ス(代リノ質
又ハ抵當ハ一概ニ故トノ物件ト同一ノモノニ及バス)
第二 前項ノ場合ニ於テ代リ質又ハ抵當ニ差入ル可キ物件ノア

ラザル時ハ最初約條ノ返濟期限未滿内ト雖モ債主ハ出訴シテ身
代限ノ處分ヲ求ムルコトヲ得ルナリ

第三 質入書入ノ地所ヲ池成野地成等ニ變換スルカ關崩等ノタ
メ土地ノ幾分ヲ失フカ建物ノ幾分ガ崩壞スルカ船舶ノ幾分ガ損
ズルカニシテ貸借金數高ニ足ラズト見込ム時ハ修繕シテ舊ニ復
スレバトモ角モ左ナキ時ニハ増質又ハ増書入ヲ債主ヨリ負債主
ニ請求スルノ權有リトス

第四 前項ノ場合ニ於テ増質増書入ヲ爲スベキ物件ノアラザル
時ハ最初約束ノ返濟期限未滿内ト雖モ債主ハ出訴シテ身代限ノ
處分ヲ求ムルコトヲ得ルナリ

○第五節 印紙類

第二十 明治十七年四月廿九日札幌縣ヨリ司法省へ何電報

身代限財産ノ内証券印紙郵便切手等所持スル者有リ右公賣ニ附ス
ヘキヤ又ハ義務者ヨリ願ヒ出サセ官廳ニテ一割引ヲ以テ買上ヘキヤ
○指令 十七年五月二十三日

身代限財産ノ取扱ニ付四月廿九日付伺ノ証券印紙郵便紙ハ地方廳ニテ
原價ト引換郵便切手ハ驛遞本分局へ廻シ郵便條例第三十六條第三十
七條ノ處分ヲ請フヘシ

第二十解 証券印紙(郵便紙ハ現行ニ廢セラル)手形用紙訴訟印紙(本
伺ニ訴訟印紙ハナケレドモ無論含有スルナラン)郵便切手等ハ通
常ノ財産ト異ニシテ人民相互ノ間ニ賣買スルコトヲ禁ゼラレタル
モノナレバ所持人身代限ノ處分ニ遭フトキハ証券印紙訴訟印紙
(煙草印紙賣藥印紙モ同様ナラン)ハ府縣廳ニテ原價(原價トハ印紙

面ノ金額ナルベシ)ニテ引換ヘラル而シテ郵便切手ハ郵便條例ノア
ルヲ以テ條例ニヨリ二割又ハ一割引ニテ驛遞本分局ノ内へ買戻
サル、ナリ

郵便條例第三十六條 郵便切手并封皮葉書帶紙ノ汚斑毀損捺印
アルモノ及税額印面不明瞭ナルモノハ其効用ヲ失フ然レモ其
未タ使用セサルモノニ限リ二人以上ノ証人ヲ立テ其理由ヲ明
瞭ナラシムルトキハ驛遞局ニ於テ定價十分二減ニテ買戻スヘ
シ

郵便條例第三十七條 驛遞局及一等郵便局ニ於テハ四枚以上聯
續シタル郵便切手并封皮葉書帶紙ヲ其所持人ノ請求ニ依リ定
價十分一減ニテ買戻スベシ

○第六節 佻人へ貸附ノ財産又ハ佻人ノ財産

〔第二十一〕明治七年九月四日司法省第二十三號達

金穀ヲ借り返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内佻人へ貸附置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相違置候處詮議ノ次第有之左ノ通改正候條此旨相違候事

第一條

各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ佻人へ貸附置キタル金穀ノ証文有之時ハ其証文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス証文ニ記名シタル負債主へ眞偽ヲ尋テ無相違時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主へ申渡シ別紙離形ニ倣ヒ証文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條

前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其証文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事
但シ定約期限ノ証文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條

債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸附置キタル金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トへ金高ニ應シ配當シソノ落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事
但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ

事

第四條

證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之レヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ證文ニ記載シタル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條

若シ證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ證文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代限ニ遭ヒテ證文ニ記名シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ證文ニ記名シタル負債主ヨリ證文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次

第返濟スヘキ旨ノ證文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時曩ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條

證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人巳ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

證文裏書雛形

表書ノ貸何ノ誰儀年號月日身代限申付候ニ付此證文ハ入札ヲ以テ渡入札ヲ以テ五某府縣管下某國某郡某町何之誰ハ相渡候條此證書ノ字ヲ書加フヘシ金額ハ右何之誰ハ濟方致候上其段當裁判所ヘ可届出事

年號月日

某 裁判所 印

三十四

第廿一解 本號ノ達ハ身代限ニ遭フ者ヨリ佗ニ貸付物件アルトキニ裁判所ニ於テノ取扱方ヲ示サレタルモノニシテ法文頗ル綿密ナレハ別ニ解スルモノナシ故ニ茲ニ畧ス

第二十二 明治十七年五月廿八日和歌山縣ヨリ司法省ヘ伺

身代限差押ノ儀ハ該家所有物ニ限リ他人ノ財産ニ及ホスヘキモノニ無之處其差押ニ際シ該家中ニ有之財産ノ内佗ヨリ借品若クハ預リ品有之事實相違無之時ハ差押ニ及ハサル儀ト存候處官報第二百廿九號伺指令欄内福島縣伺第三條ヘ司法省指令ノ趣ニ據レハ證據ノ有無ニ不拘差押フヘキ旨ニ有之右ハ其證據ノ不充分ナル場合ニ於テハ都テ差押ヘ確證例ヘハ借家住居ノ者ニシテ建具付借用ノ證書差入有之モノハ其家及ヒ建具ハ差押ヘサルノ類有之双方貸主借主異議無之モノ

ハ差押ニ及ハサル哉將タ確證アルモ尙可差押モノトセハ一應郡區長ヨリ裁判所ヘ照會シ認可ヲ得テ其確證アルモノハ之ヲ除クヘキ儀ニシテ其貸又ハ預ケ人ヨリ其取戻シテ裁判所ヘ直ニ可申出筋無之儀ト相心得可然哉此段相伺候也

○指令 十七年六月二十日

伺ノ趣公證記名若クハ賣買讓渡規則アル財産ニシテ他人ニ屬スルモノヲ除クノ外總テ差押フヘキモノトス
但差押ヘラレタル物件ノ返還ヲ求ムルニハ其請求者自カラ裁判所ニ申出ヘキ義ト心得ヘシ

第廿二解 身代限ニ遭フ者ハ已レノ財産ヲ隱匿スルノ弊ハ一般甚ダ多ク亦々人情茲ニ趣キ易キモノナリ此ノ弊ヲ防グタメ刑法ニ於テ其罪ヲ定メラレタレドモ狡猾手段ヲ以テスルトキハ佗ニ

三十五

隱匿ノ道ヲシト謂フ可カラズ殊ニ已レソ所有物ヲ他人ノ名義ヲ假リ巧ミニ差押ヲ免ル、モノ少シトセズ依テ身代限ニ遭フ者ノ家中ニアルモノハ誰レ彼レノ物品タルヲ問ハズ預リ物品又ハ借受ケ物品タルヲ問ハズ公證ノ記名アルモノト賣買讓渡規則アルモノト(譬ヘハ地所家屋船舶公債證書ノ如キ類ナリ)ヲ除クノ外ハ都テ差押物件ノ内ニ加フベキモノトス然レドモ眞ニ他人ノ所有ニシテ身代限ニ遭フタル者ノ所有ニ非ザルモノナレバ所有主ハ自ラ裁判所ニ到リ其返還ノ請求ヲ爲サバ返還サル、ヤ勿論ナルベシ

本伺中ニアル福嶋縣伺ノ第三條ハ第三章第一節即チ官吏ノ取扱ナル節目中ニ載ス參看スベシ

附録一明

治十八年

一月十九

日愛媛縣

ヨリ司法

省へ伺

戸主身代

限之節ハ

土地建物

并ニ記名

アル公債

證書ヲ除

キ非戸主

ノ所有ニ

係ル動産

物ハ総テ

戸主財産

○第七節 戸主身代限ノ時非戸主ノ財産

第二十三明 治十六年十月一日佐賀縣ヨリ司法省へ伺

一 隠居及尊族ノ動不動産ハ同居別居ヲ不問戸主身代限ニハ連及セサル者ト心得然ル可哉

一 子弟及卑族ノ動不動産モ亦尊族ノ財産ト同様心得然ル可哉

一 妻ノ動不動産ハ戸主ノ財産ニ加ヘ可然哉

一 以上ノ財産之ヲ區別スルモノニ候ハ、條例成規アル簿冊ニ記名アルモノハ勿論建物船舶等ノ如キ賣買讓與ノ規則アリテ公證ヲ受ケタルモノ及ヒ現ニ其所有ヲ證スルニ足ルモノヲ以テ區分スヘキヤ

右差掛候儀之レ有候ニ付至急御指揮相成度此段相伺候也

○指令 十六年十月二十九日

伺之趣家族ノ財産ハ同居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所

ニ組込糶
賣相成例
規ニ有之
候得共其
内非戸主
ノ所有
ル不明確
ナル分取
除クヘキ
儀ニ候哉
前項若シ
否ストナ
ストキハ
非戸主カ
篤行奇特
ノ行爲ニ
據リ賜リ

及ヒ賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込
ムヘキモノトス

第二十四 明治十六年十月廿三日和歌山縣ヨリ司法省ヘ伺

第一條 爰ニ刑事ニ關シ乙ヨリ甲ニ對シ告發ヲ爲シ裁判所ニ於テ豫
審ノ末無罪ノ申渡ヲ受ケタルモノアリ因茲甲ハ乙ヲ被告トシ損害
要償ノ訴ヲ爲シ乙ハ其損害ヲ償フヘキノ申渡ヲ受ケタリ然ルニ乙
ハ其償ヲナサス所有財産ノ幾分ヲ長男丙(全籍中ノ者ニテ未タ戸主
ノ幾分ヲ)ヘ讓渡シタル後損害金ノ幾分ヲ償却シ其不足金渡シ方延
日ヲ求ムルモ甲之ヲ肯ンセス終ニ裁判執行ノ訴ヲナシ原被示談身
代限ノ申立ヲ爲セリ右身代限財産處分ノ上償金ニ不足ヲ生スルモ
曩ニ丙(男)ヘ讓渡シタル記名ノ財産ニハ及ホサル儀ニ候哉
第二條 前同様ノ事實ナル無記名ノ財産ハ戸主ノ身代限ニ組入ルヘ

タル金銀
米杯等ハ

如何處分

可然哉

○指令

十八年

二月十

八日

伺ノ趣左

ノ通心得

可シ但主

管ニ付當

省ヨリ指

令ス

第一項

公債證書

地所ノ如

キ儀ニ可有之哉

○指令 十六年十一月十日

伺之趣左之通心得ヘシ

第一條 償金ニ不足ヲ生スルキハ甲ハ丙ニ對シテ更ニ辨濟ノ請求ヲ

訴ルヲ得ヘシ

第二條 見込ノ通

第二十五 明治十六年十一月十九日三重縣ヨリ司法省ヘ伺

官報第四百四號中ニ佐賀縣ヨリ戸主身代限ノ際非戸主ノ財産處分之儀
御省ヘ伺指令登載有之右御指令ニ家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス
公証記名アル公債証書地所及ヒ賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除ク
ノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトストアリ然ルニ村邑僻地ニ
至テハ伯叔父母兄弟等籍ヲ分タスシテ別居シ毫モ本家ノ保護ヲ受ケ

中成法上
所有者ノ
記名アル
モノニ非
サレハ取
除ク可キ
限リニア
ラズ
第二項
賞賜ニ係
ル金銀木
杯等ハ差
押フ可キ
限リニア
ラス

スノ活計ヲ營ミ自力ヲ以テ産ヲ興シ恰モ一戸獨立ノ姿ヲ爲ス者往々有之若シ此等ノ者ヲシテ戸主ノ身代限ニ連及セシムルモノトセハ多年ノ盡力一朝水泡ニ属シ甚憫諒スヘキモノアリ右等ノ如キ單ニ戸主ノ其籍ヲ同フスルノミニテ其實絶テ本家ト經濟ノ關係ヲ有セス一家獨立ノ姿ヲ爲ス者ハ其所有ヲ證スルニ足ルモノニ限リ戸主ノ財産ニ組込マサル儀ト心得可然哉

○指令 十六年十二月十二日

伺之趣別居生計ヲ立ルト雖モ分籍セサル者ノ財産ハ公證記名アル公債證書地所及賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外総テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

第二十六 明治十七年一月三十一日福嶋縣ヨリ司法省ヘ伺

戸主身代限ニ係リ候節家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス公證記名ア

ル公債證書地所及賣買讓渡之規則アル建物船舶ヲ除ク之外總テ戸主之財産ニ組込ムヘキ旨曾テ御指令ノ次第モ有之右御旨趣ニ基クハ戸主身代限ニ付財産取調之際同人ノ子弟ニシテ他方寄留出稼キ或ハ官員奉職中ニテ相應之資産ヲ所有スルモノアリ是等之者戸籍上ヨリ見ルルハ分籍シタルモノニ非サレハ無論一家族中ト見認メサルヲ得ス右一家族タル以上ハ該子弟ノ財産ニ推及可取調儀ハ勿論之事ト被考候得共聊カ疑義ニ涉リ候條此旨相伺候也
○指令 十七年二月十九日
伺之通

第二十三乃至第廿六解 本節四件ノ伺指令ハ皆ナ之レ戸主身代限ノ時非戸主ノ財産ニ連及スベキヤ否ニ係ルモノニシテ今コレヲ左ニ二項ニ分テ除ク可キ物件ト除ク可カラザル物件トヲ簡約

ニ解明セントス

第一 戸主身代限ノ時非戸主ノ財産ヲ取除ク可キ物件○非戸主
 即チ別居(獨立スルトセザルトヲ論ゼス)ト同居トニ拘ハラヌ其
 ノ所有ニ係ル公證記名(公證記名トハ地券公債證書等ノ如キ條
 例成規アル簿冊ニ記名アルモノヲ云フ)ノモノト賣買讓渡規則
 (建物船舶ノ類ナリ)アルモノトハ其戸主身代限ニ遭フモ差押
 フベキモノニ非ズ然レドモ相續人(未タ相續セス故ニ戸主非ズ)
 ガ戸主ヨリ其何分ノ財産ノ讓受ヲ爲シタルトキハ先ヅ戸主ノ財
 産ヲ糶賣シ不足ヲ生ズレバ相續人カ讓受ケタル動産不動産(公
 證記名又ハ賣買讓與ノ規則アルモノニテモ)ニモ及ボスモノト
 ス

第二 戸主身代限ノ時非戸主ノ財産ヲ差押フ可キ物件○非戸主

即チ別居(分籍シタルモノハ此ノ限ニ非ズ其外ハ前項ノ如シ)ト同
 居(他籍ノ者ガ同居シタルハ此ノ限ニ非ズ第六節ト照合スベキモ
 ノナラント)トヲ論ゼス前項ニ記シタル公證記名又ハ賣買讓與規則
 アル物件ヲ除クノ外渾テ戸主身代限ノ財産差押中ニ連及スルモ
 ノナリトス

〔第七節餘解〕 死者ノ相續ハ動産不動産ヲ問ハズ都テ相續人ニ移
 轉スルモノナレドモ生存者ノ相續ハ動産不動産ヲ問ハズ公証ノ
 記名(地券公債證書ノ如シ)アルモノハ授受ノ証據即チ記名替ヲ爲
 サズンバ其所有權ハ相續人ノ移轉セザルモノトス之レニ反シテ
 公証記名ナキ財産ハタトヘ賣買讓與ノ規則アルモノニテモ相續
 ト共ニ所有權ハ相續人ニ移轉スルナリ故ニ隱居者ニシテ公証記
 名アル財産ノ記名替ヲ相續人ニ爲サハルヨリハ相續人身代限ニ

遭フモ差押フ可キモノニ非ズトス
右ハ隱居戸主中ノ負債ナルト相續人即チ現戸主一已ノ負債ナル
トニ拘ハラザルモノナレドモ貸借等ニ係ル証書名前ヲ書換タル
トキニハ先ヅ隱居者ノ記名財産ヲ以テ償却ニ充ツベキモノナリ
トス

○第八節 非戸主身代限ノ時戸主ノ財産

〔第二十七〕明治五年九月十八日第二百七十五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督
ヲ其子ニ譲リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一已ニ金銀借受候
分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ
目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者其返金相滯訴訟ニ及

ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ
以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相違候事

〔第二十七解〕

非戸主ノ者同居別居ヲ問ハズ身代限ニ遭フトモ戸主

ノ財産ニハ連及スルモノニ非ズ戸主ト同居ノ者ナレハ非戸主身
代限ニ遭フ者所持ノ物件ノミヲ差押ヘ戸主ト別居ノモノナレハ
其別居ノ財産ノミヲ差押フヘキモノトス

右ハ本家ノ戸主ガ保證ノ調印ヲ爲サレシ時ニ限ルモノナレド
モ若シモ本家ノ戸主ガ保證ノ調印ヲ爲シタリシ時ナラバ債主ハ
戸主ノ財産ヲ目的トスルモノナルユヘ本家ノ戸主ニモ及ボベ
キモノナルベシ

〔第二十八〕

明治十七年二月廿六日兵庫縣ヨリ司法省ヘ伺

父隱居或ハ長次男ニシテ戸主ト同居スル者一已ノ負債ヨリ身代限處

分ヲ受クルニ當リテハ單ニ一身所有品ニ限リ公賣處分ヲ受ケ戸主ノ
財産ニ及ハサルハ勿論ニ付假令本人ニ隨屬シタル妻子アリト雖モ均
シク一戸主經濟中ニ生活スル者ナレハ妻子所有品ニモ波及セサル筋
ト考量候得共若シ同戸籍ニシテ異名分産ノ者ニ候ハ、自然財産上分
界相立候儀ニ付妻子所有品ト雖モ記名アル公債證書地所及ヒ賣買讓
渡ノ規則ヲ履ミタル建物船舶ヲ除クノ外總テ本人身代限財産ニ組込
ムヘキ筋ト心得可然哉

○指令 十七年三月十二日

伺ノ趣戸主ト同籍ニシテ異居分産セル隠居又ハ長次男ニシテ身代限
ニ遇フト雖モ其妻子ノ所有品ハ隠居又ハ長次男ノ財産中ニ組込ムヘ
キ限リニアラス

第廿八解 異居分産シテ一戸獨立ノ活計ヲ營ムモノト雖モ戸籍

ヲ分タザルヨリハ本家ノ戸主ノ經濟中ニ生活スルモノナリ故ニ
戸主ノ長次男其外ノ者ノ妻子モ某長次男其外ノ者ヲ指スノ家族
ナリト稱スルコトナク戸主某ノ家族ナリ依テ隠居者又ハ長次男同
居別居ヲ論セスガ身代限ノ處分ニ遭フタリトテ其妻子(身代限リ
ノ處分ニ遭フタル者)ノ財産ニ連及スベカラズ只々單ニ身代限
リノ處分ニ遭フ者ノ一身上ノ財産ニ止ルモノトス

○第九節 連帶義務

第二十九 明治八年四月二十日第六十三號布告

金穀其他借用證書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル
分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタ
ル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者へ償却可申付候條此旨布告候

事

但右證書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明證アルハ此限ニアラ
ス

〔第廿九解〕本號布告ハ分借ト連借トノ別ヲ立テラレタルモノニ
シテ以下餘解ニ關係アルモノナルユヘ左ニ參考ノタメ分借ト連
借トノ別ヲ爲サントス

第二 分借○數名連印ノ義務ノ證書ニシテ誰某ハ若干ヲ負擔シ
誰某ハ若干ヲ負擔スト各連印者ノ分帶義務ヲ明記シアルモノハ
即チ分借ナルユヘ各自其ノ負擔ダケヲ償却セシムルモノナリ又
タ各自分帶ノ義務ノ負擔額ヲ明記シアラズトモ債主ニ於テ負債
者カ分帶義務ナリト認ムルニ足ルベキ明ラカナル證據アルトキ
ハ分借ナルモノナリ譬ヘハ借用證書中ニ各分帶ヲ以テ返金スベ

シナド記載シアルトキハ數人分頭ニ應ジテ義務ヲ盡スベキノ類
ナリ

第二 連借○數名連印ノ義務ノ證書ニシテ前項ノ如キ分帶ノ明
證ナキモノハ之レヲ數名連帶シテ負擔スルモノナリトス故ニ連
印者ノ中ニテ失踪スルモノアリ又ハ死亡スルモノアリテ其ノ相
續人未ダ之レナキ場合ニテモ現存スル連印者之レヲ負フテ全額
ノ義務ヲ盡スベキモノナリトス

〔本節餘解〕連帶ノ義務者中ノ何名ガ失踪スルカ死亡スルカニテ
其ノ相續人ナキ場合ニハ現存ノ者ノミヲ相手取ルモノナレドモ
斯クノ如キ場合ニアラザルヨリハ連印中ノ何名ヲ撰ミテ訴テ起
スヲ能ハザルモノナリ故ニ身代限ノ處分ノ如キモ連帶者一同ニ
係ルモノニシテ其中ノ何名ニ係ルコトハ能ハザルモノトス

茲ニ甲乙丙ナル三名連帶シテイ某ヨリ金若干ヲ借用シ居リシニ其期未ダ滿タザル前ニ連印中ノ乙ハ乃某ヨリ借用シタル一巳ノ負債ノ爲メ身代限ノ處分ヲ受ケタリ此ノ場合ニ當リ連帶義務ノ借金ハ期限ニ至ラズト雖モイナル債主ハ連帶者一同ニ對シ返金ノ訟求ヲ爲スヲ得ルモノト不於是乎甲丙ナル二名ハ乙ノ爲メニ大ナル迷惑ヲ來スモノナレドモ如何セン連帶ハ決シテ分離スベカラズ全ク一体ノモノナルユヘ斯クハ處分セラル、モノナル

○第十節 請人証人辨償及代償

第三十一 明治八年六月八日第百二號布告

明治六年(六月)第百九十五號布告金穀貸借請人証人辨償規則本年十

月一日ヨリ左之通改正候條同日以後借用證書へ加印候者ハ改正ノ通可相心得此旨布告候事

金穀貸借請人証人辨償規則

第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申附候上不足相立候節ハ其不足ノ分(請人証人)へ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其(請人証人)ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ(請人証人)ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條 借主逃亡又ハ死亡跡相續人無之時ハ其(請人証人)へ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハ、(請人証人)ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ離形之通裁判所ニ於テ其ノ原證文ノ裏へ記シ押印ノ上貸主へ可相渡

置事

裏書雛形

第一條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓相滞ルニ付借主何ノ誰身代限申付ル處不足相立(請人證人)何ノ誰ヲモ身代限ヲ以テ辨償爲致都合金何百何拾圓ニ相成ニ付右請取殘リ何百何拾圓借主何ノ誰(請人證人)何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致モノ也

年月日

某 裁判所 印

第二條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓借主何ノ誰逃亡死去跡相續人無之ニ付(請人證人)何ノ誰ハ身代限ヲ以テ辨償申付ル處金何百何拾圓ニ相成ニ付右受取殘リ何百何拾圓ハ(請人證人)何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル

マテ身代持直シ次第皆濟可致モノ也

年月日

某 裁判所 印

第三十解

本號ノ法律ハ即チ請人證人カ本人ノ義務ニ不足ヲ生シタル時其不足ヲ補フベキ規則ナリ既ニ布告文ニ於テ明瞭ナルヲ以テ別ニ解明ヲ要セズ

第三十一 明治十六年十二月五日福嶋縣ヨリ司法省へ伺ノ内

第一條 茲ニ前戶主甲某アリ其戶主中ニ爲シタル負債後戶主乙某ニ於テ引受ク身代限濟シ方承諾ス然ルニ曾テ債主ニ差入アル證書ハ甲者ノ名面ニシテ其抵當タル土地ノ如キモ甲者ノ所有 戶主換ノ節ニ由分ナルキハ右負債ハ假令乙者ニ於テ代辨スルニ至レリト雖モ債主ヲシテ信ヲ置カシタル其抵當物件ハ財産取調ニ組入レ可然乎又ハ乙者カ甲者ニ代リ其義務ヲ尽スヲ原被告人承諾セシ上ハ現

ニ甲者ノ記名アル地券ノ如キ其調ニ不組入儀ニ候哉

○指令 十六年十二月二十五日

伺之趣左ノ通必得ヘシ

第一條 乙者代償ノコトヲ債主ノ承諾ノ上ハ後段見込ノ通り

第三十一解

此ノ伺指令ハ前戸主ノ負債ヲ後戸主カ引受ク身代

限ノ處分ニ遭フ時ノコトヲ示サレタルモノニシテ是時債主ニ於テ
乙即チ後戸主ガ甲即チ前戸主ノ負債ヲ代償スベキコトヲ承諾シタ
ル時ハタトヘ前戸主ガ已レノ名面ナル地所公債證書ノ類ヲ既ニ
債主ヘ買入又ハ書入アルトモ乙即チ後戸主(代償者ナリ)ノ身代限
財産中へ組込ニ差押フルコトハ能ハザルモノナリ是レ當ニ前戸主
ト後戸主トノ間柄ノミナラス佗人ト佗人トノ間柄ニ於ケルモ亦
タ同様ニ代償スルコト能フ可キモノナラン

○附節第一 公証猶豫及財産差押

第三十二 明治十五年十二月二十一日第六十號布告

戸長ニ於テ地所建物船舶賣買讓渡及ヒ買入書入ノ公證ヲ爲スヘキ際
該物件又ハ所有主ノ身分ニ關シ既ニ訴訟ヲ起シ公證猶豫ノ儀申立ル
者アル時ハ其裁判ヲ執行シ得ヘキ迄公證ヲ爲スヘカラス
右奉 勅旨布告候事

第三十三 明治十七年三月十七日第五號布達

明治十五年 十二月 第六十號布告ハ勸解又ハ刑事告訴中ナルヲ以テ公證
猶豫申立ル者アル場合ニモ適用スヘキモノトス
右布達候事

第三十四 明治十六年十二月二十五日三重縣ヨリ司法省ヘ伺

第一條 客年第六十號ヲ以テ戸長ニ於テ地所建物船舶賣買讓渡及質入書入ノ公證ヲ爲スヘキ際該物件又ハ所有主ノ身分ニ關シ既ニ訴訟ヲ起シ公證猶豫ノ儀申立ル者アルキハ其裁判ヲ執行シ得ヘキ迄公證ヲ爲スヘカラサル旨公布相成候處裁判ヲ決後明治十年第十九號布告控訴上告手續第四條ニ依リ事理ヲ熟考スル時日即チ七日間ハ其執行ヲ停メ七日經過后ハ同第六條ニ依リ始審裁判所ニ控訴ノ届出ヲ爲ス者ヲ除キ其他ハ直チニ執行セラル、順序ニ候哉果ソ然ラハ裁判々決濟ノ確證ヲ以テ被告入ヨリ公證ヲ申出ルル事理ヲ熟考スル七日間ハ戸長ニ於テ公證ヲ爲スヘカラサル義ニ候哉

第二條 若シ果ソ前條ノ如クナレハ裁判々決後七日ヲ經過シ始審裁判所ニ控訴ノ届出ヲ爲シ若クハ商事ニ係リ急速ヲ要シ七日内ニ控訴ノ届出ヲ爲シ裁判執行ヲ停止シタル確證アル場合ハ戸長ニ於テ

公證ヲ與ヘス又該控訴ノ届出未爲サル、間ハ控訴期限ニヶ月以内ト雖モ渾テ公證ヲ與フヘキ儀ト心得可然哉

○指令 十七年一月廿九日

伺ノ趣控訴ヲナシタル時ハ終審ノ裁判執行ヲナシ得ル迄公證ヲナサルハ勿論控訴ヲナサル時ト雖モ控訴上告手續第五條控訴期限内ハ公證ヲ猶豫スヘキ儀ト心得ヘシ

【第卅二乃至第卅四解】十五年第六十號布告公證猶豫ノ義ニ付テハ其解釋ヲ誤ルモノ勘シトセズ甚ダシキニ至リテハ一地方内ト雖モ其見解ヲ異ニシ間々不都合ヲ生ズルコトアリト聞ク依テ編者ハ正當トスル解明ヲ左ニ爲サントス

地所建物船舶ノ如キ戸長ノ公證シテ授受スヘキ財産ニシテ其財產ニ對シ勸解出願民事訴訟刑事告訴等ヲ爲スモノアリテ其原告

者ヨリ其財産ノ質入書入賣買讓渡等ノ公證ヲ猶豫セラレシトナ
 管理ノ戸長へ出願スルトキハ勸解中ナラハ其濟口又ハ不調トナ
 リタルマテ民事訴訟中ナラハ其裁判執行マデ(控訴シタルトキ
 ハ終審裁判執行マデ控訴セザルトキハ控訴期限内)刑事告訴中
 ナラハ豫審終結言渡又ハ裁判言渡ノ確定ニ迄ハ戸長ニ於テ誰
 レヨリ公證ヲ願出ルトモ決シテ爲スコトナシ
 右ハ戸長ノ公證スベキ財産ヨリ起リタル事件ニ付テノ公證猶豫
 ナレドモ強チ其財産ヨリ起ラズトモ所有主ノ身分即チ他ノ權義
 上ヨリ起リタル争ナル時ト雖モ其争ヒ中ノ事件ニ關セサル財産
 ノ公證ヲモ猶豫ヲ請求スルコト能フモノトス
 又タ公債證書ノ事ハ明記ナケレトモ公債證書ナルモノハ公證記
 名ノ物件ナルニハ第六十號布告ニ準據スルコト能フモノナルベク

思ハル

第三十五

明治十六年八月二十日茨城縣ヨリ司法省へ伺

通常貸借訴訟事件(身代限リ確定前)ニ付原告請求ニ因リ被告所有ノ不
 動産(客年第六十號公布ニ關係ナキ財産)ヲ質書入等ノ際裁判官ニ於テ
 特ニ公證猶豫セシムル場合有之候哉至急何分ノ御指揮有之度此段相
 伺候也

○指令 十六年九月三日

伺面ノ如キ場合ニ於テ裁判官ハ事宜ニ依リ假ニ被告ノ財産ヲ差押ヘ
 シムルコトアルヘキヲ以テ其差押ヘタル不動産ニ對シテハ戸長ニ於テ
 質入書入等ノ公證ヲ爲スヘカラサルハ勿論ナル儀ト心得ヘシ

第卅五解

被告ノ財産ト雖モ身代限ノ處分ニ至ル迄ハ裁判官タ
 リトテ之レヲ差押フルノ權ハナキモノナリ然レドモ原告ノ請求

ニ依リ裁判官ニ於テ差押フベキモノナリト認ムル時ハ身代限處分前タリトテ假リニ被告ノ財産ヲ差押ヘラル、トアリ此ノ時被告ニ於テ其ノ財産ヲ質入書入賣買讓與等爲スベカラザルハ勿論戸長ニ於テモ公證ヲ爲スト能ハザルモノトス

第三十六 明治十七年七月十日長崎縣ヨリ司法省ヘ伺

建物書入公證之義ハ明治八年九月第四百四十八號布告第五條ノ通ニ有之候處茲ニ戸長ニ於テ書入證文ニ番號ヲ朱書シ割印ヲ捺シアリト雖奥書無之且圖面ニハ奥書ヲ要セサルモノニ奥書シ番號割印ヲ付セサルノミナラス其繼目ニ契印モ無之如是規則ニ違背シタリト雖モ戸長ノ公證ハ無効ニ屬スヘキ限リニアラスト相心得可然哉

〇指令 十七年八月十三日

伺ノ趣書入證文ニ奥書無之ト雖モ其番號割印判然シ且戸長役場ノ建

物書入質記載帳ニ登記有之上ハ無効ト爲スノ限リニアラス但圖面ニ番號割印及其繼目ニ契印ナキ等ニ因リ異論アル場合ハ格別ノ儀ト心得ヘシ

第三十六解 此ノ伺指令ハ規則ノ公式ニ背キタル公證ノ有効無効ヲ判タレタルモノニシテ指令文ニテ明瞭ナルユヘ今茲ニ解明セズ

第三十七 明治十六年七月十八日内務省番外達

後見人職務權限ノ義ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺御指令相成候條爲心得此旨相達候事

後見人職務權限ノ儀ニ付伺

後見人規則發布ノ義ハ目下急施ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上稟シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣ヘ追テ一般ノ法律制定相成マ

テ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指令及ヒ來候處爾後後見職務ノ權限伺出ル府縣夥多有之抑後見人ハ當初親族ニ於テ撰任シタルモノナレバ常ニ監察スヘキ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動産賣買讓渡費書入等ニ限リ其證書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戶長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相伺候也

明治十六年五月卅日

内務卿山田顯義

太政大臣三條實美殿

伺之趣聞届候事

明治十六年七月三日

【第七解】後見人カ非後見人ノ不動産ヲ賣買讓渡書入質入等ノ時ニ當リ親族ノ連署ナクハ戶長ニ於テ公證セザルヲ定メラレ

タル達文ニシテ其達ヲ見ハ明カナルユヘ別ニ解カズ

【本節餘解】左ニ不動産ニ屬スルヲ以テ不動産ト認定スヘキモノヲ示サントス

- 第一 土地ニ生ズル樹木ハ森林ニアルト平地又ハ庭園ニアルトヲ問ハズ土地ニ生立中ハ不動産ニ屬ス
- 第二 田畠其他ニ生ズル穀類ハ其蒔取以前即チ其地ニ生立中ハ不動産ニ屬ス

○附節第二 代理者

【第三十八】明治六年六月十八日第二百十五號布告ノ内

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨相達候事

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已レノ名義ヲ以テ他人ヲ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ビ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タル可シ

第八條 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスルキハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

第卅八解 代人規則ハ此ノ外五ヶ條ト一書式トアリテ代人關係

ニハ一モ欠ク可カラザルモノナレドモ編者カ代理者ナル一節ヲ附シタルハ代人ガ義務者ト爲ルコアル即チ代人規則第二條ノ事實變例ヲ述ベントスルニアルユヘ茲ニハ略シヌ

本節餘解 代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルベキコトハ代人規則第二條ニ明文アリ然ルニ代人ニシテ如何ナル惡意アルカ如何ナル不正アルカハ豫メ推測スベカラズ代人ノ惡意不正等ノ所行ハ如何ニ委任上ノ代人ナリトテ之レヲ本人ノ義務ニ販セシムル譯ニハ至ルマシ依テ權利者ニシテ代人ヲ出訴スベキモノナリト認メ本人ヲ措テ代人ヲ出訴スル時ニ當リテモ裁判所ハ之レヲ棄却スルコトナク權利者カ代人ヲ相手取タル時ニハ本人ヲ引合人トシ本人ヲ相手取タルトキニハ代人ヲ引合人トシ取調ノ末曲ニ決シタル者ノ一已ヨリ義務ヲ尽サシムルモノナルヤ勿論ナリ

○第三章 入札糶賣

【本章解】 本章ニ於テハ身代限處分ニ付キ郡區戸長ノ取扱ヒ原被兩造ノ立會如何揭示入札等ヲ節ニ分チテ掲載セリ

○第一節 郡區戸長ノ取扱

【第三十九】 明治十一年七月廿五日第三十二號達ノ内

府縣官職制ノ内

地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事令ニ報告スルヲ得ルモノ左ノ件々トス

- 第三 身代限財產取調ノ事
- 第四 逃亡死亡絶家ノ財產處分ノ事

【第四十】 明治十七年五月廿六日岡山縣ヨリ司法省ヘ伺

身代限財產處分ノ義ハ府縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事縣令ニ報告スルヲ得ルノ項目即チ其第三項ニ依リ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラル、而已ナラス明治五年第百八十七號公布身代限規則中最後ノ項目但書結文ノ趣ニ依リ糶賣代價相當ト見込ムキハ直ニ落札ノ義ヲ達スルハ素ヨリ郡長ノ權内ト心得居申候處本年四月官報第二百二十九號伺指令欄内福嶋縣伺第二條御指令ノ趣ニ依レハ身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品類ハ郡長ニ於テ直ニ査定シ糶賣落札達方ハ裁判所ノ認許ヲ得ルノ手續キ御明示有之當縣從來ノ見解ト異リ候ニ付尙ホ彼是熟考候處抑身代限財產處分之義ハ既ニ郡區長ノ事務ニ屬シ況ンヤ前陳ノ公布身代限規則中最後ノ項目但書結文等翫味スルニ裁判官ノ認許ヲ得サレハ郡長ニ於テ直ニ落札ノ義ヲ達スル

ノ權ヲキモノトノ精神含蓄セリトモ解シカタク且ツ本人ノ望ニ任セ
差押フベカラサル品類ハ郡長ニ於テ査定シ落札達方ノ點ハ裁判所ノ
認許ヲ得ルハ聊權衡ヲ得サル様被存加之ス糶賣ノ義ハ貸主借主雙方
ヨリ鑑定人差出シ他人ト共ニ入札シ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價
ヲ定ムル規則ノアル以上尙ホ裁判所ノ認許ヲ得ルハ聊相感候條至急
何分之御明示相成度此段相伺候也

○指令 十七年六月十二日

伺ノ趣府縣官職制ニ身代限財產取扱ノ事トアルハ其財產ノ取扱ヲ爲
スヲ示サレタルモノニシテ其處分權ヲ與ヘラレタルニ非ス又身代限
規則末段但書ハ入札中ノ高札ヲ以テ其財產即物件ノ價ヲ定ム可キ
ヲ示サレタルモノニシテ該物件公賣ノ處分即落札ヲ直達スヘキ權ヲ
與ヘラレタルニ非ス依テ落札ノ儀ハ裁判所ノ認許ヲ得タル上相達ス

可キ筋ト可心得事

但福嶋縣伺ニ對シ郡長ニ於テ抵償トシテ差押フヘカラサル品類ヲ
査定スヘキ手續ヲ指示シタル儀ハ無之候事

〔第四十一〕 明治十七年三月十九日福嶋縣ヨリ司法省ヘ伺

第一條 戶主身代限之處分ヲ受ケタル時其子弟ニシテ他方寄留官途
奉職等ヲ爲シ相應ノ資産ヲ有スル者ハ俱ニ其財產ヲモ取調ラヘキ
旨ハ曾テ御指令ノ次第モ有之候處然ル場合ニ於テ該財產ノ取調方
ハ先ツ郡長ハ裁判所ヨリノ照會ニ依リ本籍戶長ヲ取調ニシテ寄留
等有若シ分居同籍者有之キハ本管郡長ヨリ寄留地郡長ニ委囑取調ヲ
完結スヘキ順序ニ可有之哉

第二條 明治五年第百八十七號公布華士族身代限規則申外入札人ト
共ニ入札爲致村役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム

可キ云々ト有之候處府縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シ
テ後知事令ニ報告スルヲ得ルノ項目即チ其第三項ニ依リ身代限ノ
財産取扱ノ事ハ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラレ候上ハ前規則ノ町役人
ハ現今ノ郡長ニ於テ査定ス可キ筋ト心得可然哉

第三條 財産取調之際正當ノ事由アリテ立會ヲ要セス取調ヲ完結ス
ルハ貸主預ケ主等ヨリ其家内ニ存在スル物品ノ中返還ヲ求ムルモ
戶長ハ其處辨ヲ爲ス可キモノニ無之旨ハ曾テ御指令有之候處尋常
被告人 取調ニ臨ミタル官吏ト雖モ之ヲ支ユヘキ權理無之哉又ハ其
家宅ニ臨ミタル以上ハ證據ノ有否ニ不拘持去ルヲ止メ取調ハ一
旦終了シ其返還ノ處分ハ曩キノ御指令ニ基キ請求スル者自ラ裁判
所ヘ可申出義ト心得可然哉

○指令 十七年四月五日

伺ノ趣ハ左ノ通心得可シ

第一條 裁判所ニ於テ其子弟寄留地ノ郡區長ヘ照會シ取調ヲ爲サシ
ムヘキモノトス

第二條 見込ノ通

但郡長ハ裁判所ノ認許ヲ得サレハ直ニ落札ヲ達スルノ權ナキモノ
トス

第三條 後段見込ノ通

〔第卅九乃至第四十一解〕 本節ハ官吏ノ取扱上ニ關スルモノナル

ユヘ別ニ解明セズ

明治五年第百八十七號布告身代限規則中ノ末項ハ本章第四節入

札ノ部ニ載ス參看スベシ

和歌山縣伺ニカ、ル〔第二十二〕ハ本節ニモ通用ス

○第二節 原被立會及立會ヲ拒ミタル時

第四十二 明治十六年七月五日千葉縣ヨリ司法省ヘ伺

一身代限財産取調及公賣ノ節原被告ニ於テ立會フヘキ成規ハ無之候得共右ハ各自ノ利害ニモ關シ候儀ニ付自ラ立會候ハ妨々有之間敷且千葉始審裁判所ニ於テハ別紙寫ノ通原被告連署ノ書面ヲ徴シ來リ候趣ニ有之然ラハ財産取調及公賣ノ當日雙方立會候ハ勿論ノ儀ニ付之ヲ執行スル郡長又ハ戶長ヨリハ原被告ヘ立會ノ儀特ニ達スルニ及ハサル儀ト心得可然哉
一果シテ然ラハ財産取調及公賣ノ節原被告双方若クハ其一方ノ者出會セサル場合ニ於テハ之ヲ執行スル郡長又ハ戶長ニ於テ其處分ヲ完結スルモ妨々無之哉

一人民相互ノ訴訟ニヨリ抵當物公賣ニ付テモ前二項ノ通心得可然哉
右相伺候條速ニ御指令有之度候也

○指令 十六年七月十九日

伺ノ趣左ノ通り

第一項 立會ノ儀ハ達スルニ及ハスト雖モ財産取調及公賣ノ期日ハ報告スヘキモノトス

第二項 財産取調ノ節被告人立會サルハ家族又ハ隣佑ノ者ヲシテ立會シムヘシ原告人立會サルハ其儘ニテ取調ヲ爲スヲ得財産公賣ノ節ハ原被告人共立會ハサルト雖モ其處分ヲ了スルヲ得ヘシ

第三項 抵當物公賣ニ付テモ身代限財産公賣ト同様心得ヘシ

第四十三 明治十六年八月八日橡木縣ヨリ司法省ヘ伺

負債者身代限ノ處分ヲ受ケ財産取調ノ際無謂差拒ニ又ハ一時所在ヲ
 晦匿スルニ當リ處分方昨十五年八月中相伺候處戸長又ハ債主ヨリ其
 裁判所へ申出處分ヲ受ク可キ旨御指令有之然ルニ官報第十九號千葉
 縣伺第二項被告人立會サルルハ家族又ハ隣伍ノ者ヲシテ立會シメ其
 處分ヲ了スルヲ得可キ旨御指令ノ趣相見へ前顯當縣伺ノ旨趣トハ聊
 カ異ナル儀トハ存候得共畢竟所在ヲ晦匿スル等ノ所爲ハ時日ヲ遷延
 シ其財産ヲ賣却シ或ハ隱匿スルノ故意ニ出ルモノニシテ實際上不都
 合不勘殊ニ郡長職制中ノ件ニ付右等ノ場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ
 待タス其家族又ハ親族若クハ隣伍ノ者立會シメ直チニ取調可然哉此
 段相伺候也

○指令 十六年八月廿三日
 伺ノ通

〔第四十四〕 明治十六年九月十日椽木縣ヨリ司法省へ伺(電報)

身代限財産調ノ際本人ハ勿論家族親族及ヒ隣家之者マテ立會ヲ拒ム
 時ハ戸長ニテ直チニ取調可然哉至急御指揮ヲ乞フ

○指令 十六年九月十九日

身代限財産調ノ儀ニ付伺ノ趣ハ見込ノ通タルヘシ但シ戸長ニ於テ財
 産調書ニ本人等立會ヲ拒ムニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スベシ

〔第四十五〕 明治十七年五月八日和歌山縣ヨリ司法省へ伺ノ内

第一條 身代限財産差押ニ際シ本人及家族不在ノ節ハ隣佑ノ者ヲシ
 テ立會セシメ若シ隣佑者之ヲ肯セサル時ハ戸長ノミ立會セシメ其
 取調ヲナスモ不苦候哉

○指令 十七年五月二十六日
 伺ノ趣ハ左ノ通

第一條 郡長又ハ戸長ニ於テ直チニ取調ヲナス可キモノトス但調書ニハ本人等立會ヲ拒ミタルニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

第四十二乃至第四十五解 伺指令數多ニ涉リ了解スルニ混淆セズト云フ可カラザルヲ以テ編者ハ之レヲ簡易ニ五項ニ分チ左ニ解明セントス

第一 身代限ニテ財産ノ取調又ハ公賣ハ原被双方ノ利害ニ關スルヲ勘ナカラザルモノナルユヘ双方立會スルヲ要スベクレドモ強チ之レヲ郡區長戸長ヨリ達スルニハ及バス只タ財産取調ノ期日ト公賣ノ期日トハ郡區長戸長ヨリ原被双方ヘ報告スベキモノナリ

第二 而ノ財産ノ取調ノ時ニ當リ原告人ノ立會ナキモ其儘ニ郡

區長戸長ニ於テ取調ヲ爲スモノナレドモ被告人ニシテ立會セザル時ハ家族親族又ハ隣佑ノ者ヲ立會セシメ取調アベキモノナリ
第三 前項ノ場合ニ於テ家族親族又ハ隣佑ノ者モ立會スルコトヲ拒ミタル時ハ郡區長又ハ戸長ニ於テ直チニ取調ヲナシ其財産調書ニ立會ヲ拒ミタルユヘ立會ナクシテ取調ヲ爲シタルコトヲ附記スルモノトス
第四 公賣ノ時ニハ原被ノ立會ナクトモ其儘ニテ其取扱ヲナスベキモノトス
第五 身代限ニアラズ原被双方示談ノ上抵當物ヲ公賣スル時ノ手續モ右四項ニ準ズベシ
前節第四十一 伺指令ノ第三條ハ本節ニ通用スベキモノナルユヘ援引スベシ

〔第四十六〕明治十六年十月八日佐賀縣ヨリ司法省へ伺

身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ差拒ミ候者アルトハ裁判執行ヲ拒ム者ニ付戸長ヨリ直ニ裁判所へ出訴爲致來候處官報第七十一條椽木縣伺ニ對スル御指令ニ依レハ身代限ノ處分ヲ受ケル本人ハ勿論其家族親族及隣伍ノ者ニ於テ立會差拒ミ候場合ニ於テハ戸長直ニ取調ノ手續ヲナシ其旨調書ニ付記可致旨ニ有之聊カ疑義相生候條爲念此段相伺候也

追テ裁判所へ出訴ヲ要セズ戸長ニ於テ直ニ調査スル儀ニ候ハ、若シ本人又ハ代理人等ニ於テ其調査ニ故障ヲ唱差拒候節ハ戸長ヨリ直ニ警察官ノ公力ヲ要スル儀ニ候哉又ハ此場合ニ於テ裁判官へ通知スル儀ニ候哉合テ御指令相成度候也

○指令 十六年十月三十一日

身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アル時ハ戸長ニ於テ直ニ警察官ニ對シ公力ヲ要求スルヲ得尤モ其取調ニ故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求ムヘシ但椽木縣伺ニ對スル指令ハ立會ヲ差拒ム場合即チ立會サル時ノ處分ヲ示シタルモノト心得ヘシ

〔第四十七〕明治十七年四月廿六日千葉縣ヨリ司法省へ伺

客年十一月二日付官報第百六號身代限財産調ノ儀ニ付佐賀縣ヨリ御省へ伺ノ御指令ニ身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アルトハ戸長ニ於テ直ニ警察署ニ對シ公力ヲ要求スルヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求ムヘシト有之右故障ヲ唱フルトハ此物品ハ他ヨリ借受ケタルモノニ付財産調書ニ差加ヘキモノニアラスト申出ルモノ等ヲ指シタル儀ニ候哉右ハ假令

他ヨリ借受ケタルモノト申出ルモ其家屋内ニアルモノハ財産調書ニ
差加ヘ裁判所ニ送付スベキ儀ト相心得居候然ルニ前御指令ニ據レハ
裁判所ノ處分ヲ求メタル上財産取調ヲナスモノハ如シ疑義決兼候ニ
付此段相伺候也

○指令 十七年五月二十三日

伺ノ趣他人ノ所有ニ係ル旨ノ中立アル物品ト雖モ之ヲ財産調書ニ記
入シ且ツ其申立ケル旨ヲ附記シテ裁判所ニ送付シ該物品ノ處分方ヲ
求ム可キ儀ト心得ヘシ

〔第四十六第四十七解〕前第四十二乃至第四十五ニ於テハ原被立
會ノ事ト立會スルコトヲ拒ミタル時トノ取扱方ヲ列載シタリシガ
今茲ニハ取調ヲ拒ミタル者ト取調ニ付テノ故障トヲ取扱フコトヲ
示サシタメニ二項ニ分チテ左ニ解明ス

被告人(身代限ニ遭フタル者)又ハ其代人ニシテ郡區長又ハ戸長カ
財産取調ニ際シ正當ノ事由モナク其取調方ヲ拒ミタル時ニハ郡
區長又ハ戸長ハ警察官ニ其公力ヲ以テ取調ニ差支ナキ様要求ス
ルコトヲ得ルモノナリ
若シ被告人又ハ其代理人ニシテ取調ヲ抗拒スルニ非ズシテ其取
調ニ付故障ヲ申立タル時ハ郡區長又ハ戸長ハ裁判所ニ處分方ヲ
請求スルモノナリトス

○第三節 揭示

〔第四十八〕明治五年六月二十三日第百八十七號布告ノ内

〔編者白〕本號布告ハ即チ身代限規則ニシテ其前文即チ身代限抵
償トシテ差押フ可ラサル品類ノ項々ハ〔第三〕ニ載ス故ニ茲略ス

宜シク彼ニ就テ知ル可シ

右身代限ノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅へ揭示ヲ出シ其次第傳承日限申追願ノ者ハ取糺ノ上可處置事

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

〔第四十九〕 明治七年七月三日第七十一號布告

明治六年五月第百八十一號布告身代限揭示案左之通改正候條此旨布告候事

何村町

何之誰

右之者儀何村町何ノ誰ヨリ何々其事目出訴ニ及ヒ吟味之上身代限申付ルニ付若シ何ノ誰ヘ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所へ訴出ツヘシ右日限過去訴出

ルニ於テハ此度身代限分散金ノ分配ニハ不差加者也

〔第四十八第四十九解〕 此ノニ法律ハ身代限揭示ノ事ヲ示サレタルモノシニテ別ニ解明セズ

○第四節 入札及評價

〔第五十〕 明治五年六月廿三日第百八十七號布告ノ内

〔編者白〕 本號布告ハ即チ身代限規則ニシテ差押フ可カラサル品類ノ諸目ト第三項(末項ノ前ナリ)トハ既ニ第三ニ載セタリ依テ左ニ差押フ可カラザル品類ノ目中入札ニ關スル一目ト末項トヲ載スル

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

(一前二項後一項略ス)

一本ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者ノ道具屋一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致

サセ 町役人ニ於テ総入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事
一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ総額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過クヘカラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前並ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ揭示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ鑑定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ 町役人ニ於テ總入札ヲ比較

シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所ヘ差出スヘシ

第五十一 明治十七年五月八日和歌山縣ヨリ司法省ヘ伺ノ内

第二條 身代限ノ處分ヲ受ケタル節本人職業ヲ爲スニ必用ノ書籍并

ニ器械物品等其金額五拾圓ニ至ル迄ハ引殘スヘキ等ニ候處其五拾圓以上ナル片ハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者ノ道具屋一人宛差出シ外入札

人ト共ニ入札致サセ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其代價ヲ定ムヘキ時ノ費用ハ総テ借主ニ於テ負擔スヘキ筋ニ候哉

第三條 前條ノ場合ニ於テ貸主他郡區ニ涉リ鑑定人ヲ要スルモ一時難呼寄片ハ差押人ノ見込ヲ以テ其土地相應ノ者ヲ撰ニ鑑定爲致候モ不苦候哉

○指令 十七年五月二十六日
伺ノ趣ハ左ノ通

第二條 明治九年當省甲第五號布達第十三條ニ據リ身代限者ノ負擔タルヘシ

第三條 明治五年第百八十七號公布身代限規則ニ依ル可キモノトス

第五十二 明治九年四月二十二日司法省甲第五號布達ノ内

訴訟入費償却規則左之通改正候條此旨布達候事

第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又^町役場ニ納ム可キ評價人鑑定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費臨時計算ヲ以テ定ム右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

第五十三 明治十六年十二月五日福嶋縣ヨリ司法省ヘ伺ノ内

第二條 身代限リ入札拂之節入札上ノ價格不適當ト見認ムル場合ハ之レヲ取消シ再入札ヲ爲サシムルヲ得ヘキヤ果シテ得ルモノトセ

ハ其權限ハ揭示書ヲ發シタル裁判所ニ屬スルヤ將々郡長ニ屬スル

ヤ

○指令 十六年十二月廿五日

伺之趣左ノ通心得ヘシ

第二條 再入札セシムルヲ得其權限ハ裁判所ニ屬ス

第五十乃至第五十三解 入札法ニ關スル今此ノ說述ヲ簡明ナラ

シメシメ之レヲ五項ニ分チテ解カントス

第一 身代限ノ財産ハ入札ヲ以テ賣拂フモノトス其ノ入札ヲ爲スニハ原被双方ノ鑑定人ト外入札人ト共ニ入札セシメ郡區長又ハ戶長ハ其入札ヲ比較シ高札ヘ落スモノナリトス

第二 右落札ノ金額ヲ惣計シ負債金及ヒ訴訟入費入札費用等ニ比較シ殘金アラハ身代限ニ遭フタル者ニ返却スベシ(即チ身代限

者ハ直チニ義務ヲ終ヘタル譯ナリ

第三 身代限者ノ職業ニ要スル五十圓以内ノ物件ハ本人ノ擇ム所ニ任セ而シテ第一項ノ如ク入札シ高札ニ落シタル上五十圓以外ノ金額ニ昇ルトキハ以外ノ物件ヲ除クヘキモノトス

第四 開札ノ上不當ノ價格ナリト思考スルニ於テハ其旨ヲ原裁判所ニ請求セバ裁判所ハ其權限ヲ以テ再入札ヲ爲サシムルコトアルナリ

第五 入札ニ關スル諸入費ハ先取ノ權アルモノニシテ第四章第二節ニ解明ス就テ知ルベシ

身代限財産ヲ取扱フコトニ關スル岡山縣衙指令〔第四十〕及ヒ同伴ニ關スル福嶋縣衙指令第二項〔第四十一〕ハ茲ニ通用スヘキモノナルコトニ參看スベシ

〔第五十四〕明治十七年三月十一日福嶋縣ヨリ司法省ヘ伺ノ内

〔編者自〕本衙第一條ハ〔第十一〕ニ載ス依テ再掲セズ宜シク彼ニ就テ知ルコトヲ得ヘシ

第二條 前條果メ評價ナリトセバ該評價人(二名)ハ適宜郡長ヨリ命シ之カ日當料ハ村費等ト同シク身代限財産中ヨリ前収ス可キ者ニ候哉又ハ元來評價人ヲ命スルヤ原被告ノ爲メニアテスシテ他ノ共有者之如何ニ依リ之ヲ要スル者ナレハ之カ費用ハ自然共有者ノ負擔ニ可有之哉或ハ命セシ郡役所ヨリ支給候義ニ可有之哉

○指令 十七年四月二日
伺ノ趣ハ左ノ通り

第二條 評價人ノ日雇賃ハ共有者ヨリ辨納ノ代金又ハ財産公賣金ノ内ヨリ支出スヘキモノトス

〔第五十四解〕此ノ伺指令ヲ本節ニ挿入スルハ少シク當テ失シタルモノ、如シト雖モ共有財産分離ノ評價ニ關スルモノナルニヘ
斯クハ茲ニ掲載シタルナリ

〔第五十五〕明治七年三月二十日第三十四號達
從前布告中裁判上入札又ハ雜賣ノ定メ有之候處右處分ノ儀各地方ノ
便宜ニ隨ヒ裁判官見込ミテ以テ兩様ノ内取計ヒ苦シカラス此旨相達
候事

○第五節 地券書換

〔第五十六〕明治十六年二月一日大藏省第七號達
地稅不納及ヒ賍金追徵民事身代限等凡ソ法律上公賣處分ヲ經タル地
所又ハ地券書換ノ訴件ニ付該裁判確定シタルモノ、地券書換願書ハ

舊所有者ノ連署ヲ要セス候條買受人若シクハ權利者ヨリ其證左ヲ添
付シ戶長眞印ノ上出願候ハ、書換下付シ舊所有者所持ノ地券ハ無効
ノ旨命令シテ還納セシムヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事
但從前ノ達指令等本文ニ牴觸候分ハ廢止トス

○第四章 先取特權及賠償追徵

〔本章解〕本章ニハ租稅區町村費其他ノ先取權ヲ有スルモノ
ノ訴訟入費刑事裁判費用賍金追徵利息計算等ノ節目ヲ分
チテ掲載セリ

○第一節 先取特權ヲ有スル條件

○第一款 租稅區町村費

【本款解】國稅地方稅町村會費等ノ未納者處分ニ付テハ第三編ニ別ニ載スベキヲ以テ今本款ニ於テハ身代限ニ對シ先取ノ權アル條件ノミヲ載セントス

第五十七 明治十一年二月廿一日大藏省乙第七號達ノ内

【編者白】 佗ノ項々ハ皆テ第三編ニ載ス

一他ノ負債上ヨリ身代限ノ處分相成ル際納稅ノ期限ニ至リ不納ノ分ハ其旨裁判官ニ照會シ其未納ニ係ル財産ハ成規ノ通公賣ノ處分ニ及フモノトス

但裁判官ニ於テ己ニ財産糶賣ニ及ヒシ場合ニ於テハ裁判官ニ照會シ其糶賣代價ノ内ヨリ受取ルヘシ

一前納ニ非ル營業稅等未タ納期ニ至ラサルモ他ノ負債上ヨリ身代限ノ處分相成ルハ裁判官ニ照會シ其製造品其器物ヲ公賣シ其期節ノ

税金徴収スルモノトス

【第五十七解】本達二項ヲ以テモ租稅ハ他ノ物件ニ先シテ徴収スベキモノタルヤ明カナリ然ルニ今本達ヲ補フベキ條件アルヲ左ニ餘解セントス

【本款餘解】裁判入費ト租稅ト孰レカ先取ノ權アルヤ是レ其ノ物件ノ公賣金ヨリ租稅ヲ徴収シ餘金アリハ次テ裁判入費ヲ取立テラルハノ順序ナリ

大藏省第七號達ハ國稅ト地方稅トニ關スル規則ナリ然ルニ區町村費亦タ租稅ト同シク人民ノ義務アルモノナルニハ先取ノ特權アルヤ論ヲ俟タズ其順序ハ

第一先取特權 國稅

第二先取特權 地方稅

○第二款 雜

第五十八 明治八年四月十日第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ證書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ目マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

第五十九 明治七年一月十九日第六號布告

明治六年一月第十八號布告地所質入書入規則第九條左之通改正候條此旨布告候事

第九條 質入又ハ書入證文ニハ必ス其村町戸長ノ奥書證印ヲ取ルヘシ其村町戸長ノ役場ニハ奥書割印帳ヲ備ヘ置キ證文ノ奥書割印ヲ願出ル時ハ帳面ト證文トニ番號ヲ朱書シ割印ヲ押シ奥書ヲ爲ス可シ若シ奥書並ニ割印ナキ證文ハ質入又ハ書入ノ證據ニハ不相成ニ付右證文ヲ以テ訴出ルニ於テハ負債主財産分散ノ時債主他ノ債主ニ對シ先キ取りノ特權ヲ失ヒ獨リ質入又ハ書入ナキ金穀貸借ノ處分ヲ可受事

但戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長奥書調印スベシ

第六十 明治七年五月十二日第五十二號布告ノ内

明治六年(一月)第十八號布告地所質入書入規則中第十條第十二條左ノ

通改正候條此旨布告候事

第十條 一箇所ノ地ヲ二重三重ニ書入候儀ハ不相成候得共若シ第一番ノ金主ヘ引當ニ入レ置キ候事ヲ第二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分ヲ見込又其地所ヲ引當ニ借添ヘ致シ候儀ハ不苦尤借主身代限ノ處分ニ相成候節ハ右地所糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第貳番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡申スヘク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第貳番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足ノ分ヲ償フテ並ニ第三番以下ノ金主ニ償フテハ平常引當ナキ債主ニ身代限償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡可申事

但第貳番ノ金主ヘ受取候證文ヘハ地所代價ノ餘分ヲ見込借添候

旨ヲ書載可申事

第六十一 明治八年九月三十日第四百四十八號布告ノ内

建物書入質規則

第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三重ニ書入質ト爲ステハ嚴禁ナレモ若シ第壹番ノ金主ヘ書入質ト爲シタルコトヲ第貳番ノ金主承諾ナレハ建物代價ノ餘分ヲ見込ニ又其建物ヲ書入質ニ借添ト爲スコトヲ得ヘシ尤借主身代限ノ處分ニ至ルキハ右建物糶賣ノ代金ヲ以テ第壹番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第貳番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡スヘク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第壹番ノ金主ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第貳番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足ノ分ヲ償フテハ平常書入質ナキ貸主ニ身代限ノ償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相

當ノ割賦ヲ以テ引渡スヘシ

但第貳番ノ金主ニ渡シ置ク書入質ノ證文ニハ建物代價ノ餘分ヲ見込ニ借添タル旨ヲ書載スベシ

第五十八乃至第六十一解 地所建物船舶(船舶ノ事ハ第十九)ニ

載ス)等ハ公證アル貸借ニ係ルモノナルユヘ通常貸借トハ大ニ異ナリ依テ負債主身代限ノ處分ニ遭フモ是等ノ書入質入ニ對スル債主ハ先取ノ權アリトス今右ノ類別ヲナシ左ニ簡易ナル解明ヲナサントス

第一 地所質入書入ノ債主ハ先取ノ權ヲ有ス依テ規則ヲ遵守シタル公式ヲ履行シタルモノナラハ佗ノ債主ノタメ負債主が身代限處分ニ遭ヒ地所ノ債主期限内ニ追訴セズトモ(追訴ノ事ハ第五章ニ載ス)先取ノ特權ハ失ハザルモノトス

第二 地所建物船舶ハ公證アルトキハ先取ノ特權ヲ有スルナレドモ若シモ公式ノ公證ヲ經ザルトキハ先取ノ特權ヲ失ヒ佗ノ債主ト同一ノ權ニ止ルナリ(公式ヲ經ザルトモ効ヲ有スルモノアリ

第三十六)ヲ參看スベシ)

第三 地所建物船舶等ヲ規則ニ依リ二重三重ノ書入トナスコトハ許サレタレドモ負債主身代限ノ時ニ當リ第一ノ債主カ先取ヲナシ餘分アラハ順序元利ノ先取ヲナスベケレトモ糶賣代金ノ尽ルヨリハ第二番ニテモ第三番ニテモ書入ノ効ヲ失ヒ不足ダケハ無書入ト同一ノ權ニ止ルナリ

地主小作米ニ對スル先取ノ權ナル大坂府伺(第十一)指令ハ茲ニ引用スベキモノナリ

第六十二 明治十五年二月四日第十二號達

貸下金其他諸上納金未納ノ者他ノ負債ノ爲メ裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ル時ハ自今左ノ通處分スヘシ此旨相達候事

一貸下金其他諸上納金未納ノ者裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ其徴収ヲ取扱フ官廳ニ於テ通常公文用紙ニ未納ノ金額ヲ記載シ證書ノ寫ヲ添ヘ之ヲ其裁判所ニ請求スヘシ

一裁判所ニ於テハ該請求ノ金額ニ就テ負債者異論ナキトキハ身代限ノ配當金ヲ不足アルトキハ定例ノ其裁判所在ノ郡區長ニ交付シ郡區長ハ之ヲ其官廳ニ送達スヘシ

○第二節 裁判費用及訴訟入費

○第一款 民事ニ關スルモノ

第六十三 明治九年四月廿二日司法省甲第五號布達

訴訟入費償却規則左之通改正候條此旨布達候事

〔編者白〕 明治十七年(三月)司法省甲第一號告示ヲ以テ訴狀其外書類ノ認方ニ付行數字數認料及ヒ翻譯料ヲ改正セラレタリ依テ左ノ規則ニハ改正ヲ直チニ本文トナス

第一條

訴狀並其外書類認料

一枚廿四行二十字詰ニ付 廿錢但シ一枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被双方往復ノ文書

第二條

證人並ニ引合人差添人手當

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條

證人並ニ引合人差添人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五拾錢

第四條

證人並ニ引合人差添人旅費 滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖

モ乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノ、爲メ設ク

第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五拾錢

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條

原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五拾錢

第七條

原告人又ハ被告入直者旅費 満八里ニ付拾錢歸路モ同斷
但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條

通辯雇料

一日ニ付三圓

右定限

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定價ノ通計算スヘシ

第九條

翻譯料

一枚ニ付廿四行二十字詰
四圓但シ一枚以下モ同價

右定限

第一條ニ同シ

第十條

測量繪圖認料

右定限

第一 長三百間ニテ盡ル時ハ

百間ニ付一尺ノ割

西ノ内一枚ニ付十錢

第二 長六百間迄

百間ニ付五寸ノ割

同 十二錢

第三 長千二百間迄

百間ニ付三寸ノ割

同 十四錢

第四 長六千間迄

百間ニ付二寸ノ割

同 十七錢

第五 長一方二千間迄

百間ニ付一寸ノ割

同

二十錢

第六 長一万二千間以上

百間ニ付五分ノ割

同

廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内一枚ニ付十錢

第十一條

使賃

滿一里毎ニ十錢一里未滿ハ五錢

但シ踏路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣ハシタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノモノ掛裁判役ノ檢印

ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判

役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ

申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第十二條

郵便並ニ電信料

定價

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又町役場ニ納ム可キ評價人監定人

等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費臨時計算ヲ以テ定ム
右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

第六十四 明治九年四月廿九日司法省甲第六號布達

本年當省甲第五號布達改正訴訟入費償却規則中第三條第六條ノ儀ハ
追テ相達候迄執行不及候條此旨布達候事

第六十五 明治十二年十月廿七日司法省甲第貳號布達

明治九年第五號布達訴訟入費償却規則中差添人ニ係ル件々一切刪除
候條自今民事詞訟差添人ノ費用ハ訴訟入費トシテ請求スルコト得ス
此旨布達候事

第六十六 明治十七年二月廿日高知縣司法省ヘ伺

訴訟入費償却規則第四條但書ニ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢トア
ルハ假令ハ裁判所ヲ距ル九里ノ地ヨリ召喚ニ應シタルキハ更ニ一里

ヨリ起算シ即チ九拾錢ヲ給スルノ主旨ニ候哉將タ滿八里ノ外ヨリ一
里毎ニ金拾錢ヲ乘シ九里ハ金貳拾錢十里ハ金三拾錢ト計算スル儀ニ
候哉

○指令 十七年三月十二日

伺之趣后段見込ノ通

第六十七 明治十七年三月五口司法省甲第一號告示

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用紙規則廢セテ候ニ付テハ本年四月
一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所ヘ差出ス書類ハ都テ美濃
紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚二十四行一行二十字詰ニ書スヘ
キモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メタル
割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢翻譯料ハ一枚金四圓ト相成ル

議ト心得ヘシ

右告示候事

〔第六十八〕明治十七年二月廿三日第五號布告ノ内

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

但明治八年^{十二}第百九十六號布告訴訟用罫紙規則ハ右施行ノ日ヨ

リ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

民事訴訟用印紙規則

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償

ス可キモノトス

〔第六十九〕明治十四年十二月五日司法省第二十六號達ノ内

使丁規則

第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達

セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス

使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ貳人以上ヲ命スルコアルヘシ

第九條 送達賃錢ハ地方ノ便否ニ從ヒ書記局ニ於テ適宜其定限ヲ立

ツ可シ

但送達書ニ賃錢ノ高ヲ附記ス可シ

第十條 賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又

ハ其他ノ方法ヲ以テ公告ス可シ

第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總テ其送達

ヲ請求スル者ヨリ之ヲ拂フ可シ

第十三條 送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ

爲ス可シ

第六十三乃至第六十九解 本款示ス所ハ皆ナ之レ訴訟入費ニ關スルモノニシテ別ニ解明セズ

訴訟入費ハ先取ノ權アルモノナリト雖モ本章第一節第一款ノ餘解ニ示ス如ク租稅協議費ニ先ンシテ取ルノ權ナク又々訴訟入費償却規則第十三條ノ裁判費用ハ佗ノ訴訟入費ニ先ンシテ取ルノ權アルモノナリ

和歌山縣伺ニカ、ル第三條第五十一ハ本款ニモ通用ス參看スベシ

○第二款 刑事ニ關スルモノ

第七十一 刑法第一編第二章第四節ノ内

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費

用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第七十一 刑法附則第四章

第四十八條 豫審公判ニ付呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ムヘシ

日當五拾錢以下

旅費一里拾錢以下

止宿料一宿貳拾五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滞在
中ハ日當並ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料
ヲ給セス

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ
之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第百九十條ニ從ヒ
償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルヲアル可シ
第五十二條 解剖舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類
ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人
身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徴収ス

第七十二 治罪法第三編第三章第六節ノ内

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シ
キ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七十三 治罪法第三編第三章第六節ノ内

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可
シ

第七十四 治罪法第四編第一章ノ内

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公

訴訟費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之
ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

〔第七十五〕明治十六年十一月十三日司法省丙第九號達

刑事ニ付キ警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ起訴ノ前後ニ拘ハラズ裁判
費用ニ相立タサル者トス然レモ豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲
シタル場合ハ此限ニ在ラス此旨爲心得相達候事

但本文ニ抵觸スル指令内訓ハ取消候事

〔第七十六〕明治十六年十一月十六日司法省丁第三十三號達

本年第三十九號ヲ以テ刑法附則第四十九條改正ノ儀公布相成候ニ付
テハ各管内ニ於テ專ラ實際消費スル費額ヲ量定シ豫メ金額ノ程限ヲ

設ケ速ニ當省ヘ可伺出此旨相達候事

〔第七十乃至第七十六解〕刑事裁判費用ニノミ關スルモノニシテ
別ニ解明ヲ下サズ

〔本款餘解〕警部巡查ナドカ司法警察上ノ證人トシテ裁判所ヘ出
頭シタル時ノ旅費日當ハ刑法附則第四十八條ニ據ルモノニアラ
ズシテ各其本官ノ旅費ヲ警察費ヨリ支給セラル、モノナルベキ
手

刑法附則第五十三條ノ明文アリト雖モ裁判確定ノ前ニ於テ被告
人死去シタルトキハ相續人ニシテ裁判費用ヲ辨償スルノ責ナク
第五十三條ハ裁判確定後ヲ指シタルモノナルベシ

○第三節 利息計算

第七十七 明治十年九月十一日第六十六號布告
利息制限法左之通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニソ元金百圓以下ハ一年ニ付百分ノ二十二割百圓以上千圓以下百分ノ十五(一割五分)千圓以上百分ノ十二(一割二分)以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高キ定メサルルル裁判所ヨリ言渡ス所ノモノニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六(六分)トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アルルル總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルルルハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料等ヲ差出スベキヲ約定スルコトアルルル概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルルルハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スヲ得

第七十八 明治六年三月廿五日司法省第四十三號布達

預メ金數

賣掛代金

諸職人手間代

地代

店賃

立替金數

敷金

證據金

受負金

手附金

雇人給金

飯料

小作金穀

村入用之割合金穀

諸品ノ損料

無利息貸金穀

右ノ類ニテ金穀等可相渡期限ニ臨ニ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日且期限ナクシテ金穀入用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ雙方示談ヲ以テ利息ノ歩合ヲ定メ證書ヲ受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナクシテ追テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九十二號布告ニ因リ處分致シ候條此旨可相心得候事

第七十九 明治七年八月三十一日司法省第二十二號布達

昨明治六年當省第四十三號布達ハ左之通但書ヲ相加候條此旨布達候事

但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限り本文ノ處分ニ及フ可シ若シ雙方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サ、ル分ハ此例ニアラス

第七十八第七十九解 本布達ハ利息制限法ノ發布ナキ前ニカ、ルモノナルユヘ追々改正ヲ來タシタルモノアリ請フ左ニ其ノ改正ニカ、ルモノヲ解明セン

第一 雙方示談ヲ以テ利息ノ割合ヲ定メ云々トアレドモ利息制限法第貳條ノ制限ヲ超過スベカラザルヤ勿論ナリ

第二 明治六年第九十貳號布告ハ法律上ノ利息ヲ定メラレタルモノニシテ利息制限法第三條ヲ以テ消滅シタルモノナレバ該第三條ナリト思做スベシ

第八十 明治六年十月廿八日第百七十四號司法省布達

明治六年當省第三十八號金穀貸借利息ノ儀裁判決定迄算計可致旨及布達置候處右貸借ノ金穀返濟之日亦ハ身代限配當金處分濟ノ日迄利息ヲ計算致シ候儀ト可相心得此旨布達候事

第八十解 本達ヲ左ニ簡易ニ解明セシニ

- 第一 利息ノ計算ハ契約上ノ制限ニ成立ツモノニテモ法律上ノ制限ニ成立ツモノニテモ期限ヲ經過スルトキハ金穀ヲ皆濟返辨スル日迄ヲ計算シテ拂フベキモノトス
- 第二 若シ負債者身代限ノ處分ニ遭フトキニハ其配當金處分ノ濟ム日迄ヲ計算シテ配當スベキモノトス

○第四節 賠償及追徴

○第一款 通則

本款解 本款ニハ損害要償、贓物返還、賍金追徴ニ通用スル條件ヲ掲載スルモノナリ

第八十一 刑法第一編第二章第四節ノ内

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレ、ト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カル、トテ得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第八十二 明治十六年九月十七日於三次治安裁判所廣嶋輕罪裁判所

檢事ヨリ司法卿へ請訓

刑法第四十三條同第四十八條末項ノ旨趣ハ渾テ現ニ得ル贓ヲ指稱スルモノト了解罷在候處客年七月當裁判所ニ於テ贓金ヲ以テ買取シタル物品ヲ沒収セリ然ルニ當時檢事代理ハ之ヲ不當トシ被害者へ下付スヘキ趣意ヲ上告ス大審院ハ本年七月上告ノ如ク第四十八條ニ據リ裁決アリ右ハ凡ソ裁判例トナルヲ以テ之ニ倣フハ勿論ト雖大ニ疑團不少抑モ金ハ品ニ變化スルモ猶間接ノ贓トシ品ハ金ト同視スルモノトセハ何度其種質ヲ變スルモ同ク源贓ト同視セサルヲ得ン爰ニ一例ヲ舉ンニ農甲吉商乙吉カ賣品タル反物數拾ヲ盜ニ以農用牛馬數頭ヲ所有セハ之ヲ押収シテ乙吉ニ還付スヘシ然ルニ被害者タルモノ、常情ハ素ヨリ源贓ノ還給若クハ相當ノ要償ニ可有之右牛馬ヲ還付セラレ、如キハ迷惑少ナカラサレハ之ヲ辭退センニ判官ハ已ニ押収還付ノ

宣告ヲナシタレハ如何ヒスヘカラス其他言ヘカラス障害アルニ至ラン右ハ法理上甚々了解致兼候間何分ノ御訓示ヲ仰キ候也

○内訓 十六年十一月二日

請訓ノ趣贓金ヲ以テ買取シタル物品ハ勿論贓物ト交換シタル物品ト雖モ仍ホ贓物トシテ處分ス可キモノトス但還付ノ處分ヲ受クルモ被害者ニ於テ其物品ヲ領收セスシテ別ニ損害ノ賠償ヲ求ムルハ其隨意ナリトス此旨及内訓候也

第八十三 刑法附則第五章ノ内

第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルヲ得

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレ

ハ之ヲ請求スルヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其民事裁判所ニ

スルモノハ民事訴訟ノ程式ニ從テ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルヲ得

第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルヲ得

第八十四 治罪法第一編ノ内

編者白 治罪法第一編中ニハ私訴ニ關スル條件抄ナカラズト雖モ之レヲ尽ク載スルハ本書ノ主旨ニ非サルユヘ只タ二三ヲ左ニ

掲載スルノミ彼ノ私訴期滿免除ノ條件ノ如キハ本書本編第八章載ス就テ知ルベシ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サ、ル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第八十五 治罪法第三編第二章第二節ノ内

第一百十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマ

テ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若シクハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得
又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若シクハ其要ムル所ヲ
變更スルヲ得

第八十六 治罪法第三編第三章第十節ノ内

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判
所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ
爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留受ク
ルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告
人ノ財産ヲ差押フ可キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第八十七 治罪法第六編第一章ノ内

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還スヘキ裁判費用ニ付キ

其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第八十一乃至第八十七解 別ニ解明セズ

○第二款 損害要償

第八十八 刑法附則第五章ノ内

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現
ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルヲ得但失火ハ此限ニ在ラズ

第八十九 明治十七年六月七日第十九號布告ノ内

商標條例

第十五條 登録商標主其專用權ヲ侵サレタルトキハ之ヲ告訴シ並要
償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第九十 治罪法第一編ノ内

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出タル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヲ得
要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス但是等ノ官吏被告人

ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第八十八乃至第九十條 損害要償ニ關スル法律ハ此ノ四條件ニ限ルモノニ在ラズト雖モ一々之レヲ載スルニ違アラズ而已ナラズ民法ノ發布ナキヲ以テ損害法ノ完備シタリトモ謂フ可カラザルユヘ本章第一款ヲ參照シ尙ホ他ノ慣例ニヨリ彼是斟酌スベキモノナリ

○第三款 贓物返還

第九十一 刑法附則第五章ノ内

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシム

ル者トス

第五十五條 贓物轉轉シテ佗人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルヲ得ス

若シ公商ニ由ラスシテ買収シタル物品ハ其還給ヲ拒ムヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉償ヲ求ムルヲ得

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉償ヲ求ムルヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

【本款餘解】本款ニハ刑法第三百九十九條第四百條第四百一條明

治十六年十二月廿八日第五十號布告古物商取締條例明治十七年三月廿五日第九號布告質屋取締條例ノ關係大ナルモノトス宜シク彼是ヲ對照スベシ

○第四款 贓金追徴

【第九十二】明治十七年三月五日札幌始審裁判所檢事ヨリ司法省へ伺諸規則違犯者無資力ニシテ追徴金ヲ完納シ能ハサルハ民事裁判官ニ於テ檢察官ノ請求ニ依リ民事ノ規則ニ從ヒ身代限ヲ以テ追徴ノ處分ニ及フヘキハ勿論ナリト雖其追徴法ハ被告一身ニ止メ其子孫ニ及ホスヲ得サルモノナルカ又ハ通常民事身代限ト同ク子孫ニマテ及ホスベキモノナル乎若シ前段ノ如ク一身ニ止ルモノトスル時ハ被告カ既ニ他ニ抵當質入ト爲シタル財産ヲ除クノ外其公賣代金ハ先取特

權アル者トスレハ無論六十日間ノ揭示ヲ須ヒス直ニ其財産ヲ公賣ニ付スヘキモノニ候哉

○指令 十七年三月廿一日
伺之趣總テ民事身代限ノ規則ニ從ヒ處分シ其財産公賣代金ハ他ノ債主ト平等ニ分配ス可キ者トス但檢察官ニ於テハ違犯者ノ資力生スル迄其處分ノ請求ヲ延期スルヲ得

第九十三 明治十七年五月二十八日福嶋縣ヨリ司法省ヘ伺

第一條 戶長役場ニ於テ人民ヨリ徴収シタル租税金ノ内盜難及村吏私借引負等ニ係ル分賠償方當時其筋ヘ及起訴置後日犯人處刑該金員納付スヘキ旨宣告相成候モ本人資力無之カ又ハ等閑ニシテ不致上納片ハ賠償金額ニ不足ヲ生スル片ハ身代持直次第可致上納旨之證書差出サセ追テ徴収候儀ニ可有之哉

第二條 前條身代限處分之際ト雖モ先取ノ特權ヲ有スル儀ト相心得可然哉

○指令 十七年八月二十日
伺ノ趣左ノ通可心得事

第一條 賠償金ノ不足ハ裁判所ヨリ明治八年第百二號布告證文裏書離形ニ準シ身代持直シ次第皆濟ヲ受クヘキ旨ノ書面ヲ渡ス可キニ付追テ其書面ニ依リ還納ヲ受ク可キ義ト心得ヘシ

第二條 先取ノ特權ナキモノト心得ヘシ

編者白 八年百二號布告ハ 第三十ニ全文ヲ載ス

第九十四 明治十七年三月十五日第七號布告ノ内

地租條例

第二十五條 土地ヲ欺隱シ地租ヲ遁脱スル者ハ四圓以上四拾圓以下

ノ罰金ニ處シ現地目ニ依リ地價ヲ定メ欺隱年間ノ地租ヲ追徴ス但地租改正ノ初年以前ニ溯ルコトヲ得ス

第二十六條 第十一條第十六條ニ違犯スル者ハ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處ス其免租地ヲ有稅地ト爲シ又ハ開墾ヲ爲スコトヲ許可スヘキモノハ現地目ニ依リ地價ヲ定メ其地租増額ヲ追徴ス但地租改正ノ初年以前ニ溯ルコトヲ得ス

第二十八條 第二十五條以下ノ所犯借地人小作人ノ所爲ニ係リ所有主其情ヲ知ラサルトキハ其借地人小作人ヲ罰シ地租ハ所有主ヨリ追徴ス

第二十九條 第二十五條第二十六條第二十七條第二十八條ノ刑ニ當ル者自首スルトキハ其罰金科料ヲ免ス但其追徴スヘキ地租ハ仍ホ之ヲ納メシム

第九十四條

地租條例第十一條ハ免租地ヲ有稅地ト爲サントスルトキハ地方廳ノ許可ヲ受クベキコトヲ示サレ第十六條ハ開墾ヲ爲サントスルトキハ地方廳ノ許可ヲ受クベキコトヲ示サレタリ

第九十五條

明治十七年五月二日第十二號布告

北海道ニ於テ納稅スヘキ水產物ヲ取獲セントスルモノハ其地ノ管廳ヘ願出許可ヲ受クヘシ違フモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其物品ヲ沒収ス之ヲ賣捌キタルモノハ其代價ヲ追徴ス

右奉 勅旨布告候事

第九十六條

明治十八年一月十日第三號布告

明治十七年五月第十二號布告中北海道ニ於テ納稅スヘキ水產物ヲ取獲ノ下シ又ハ水產物ヲ有稅品ニ製造ノ十三字ヲ追加ス

右奉 勅旨布告候事

第九十七 明治十七年五月二十三日第十六號布告

自今北海道ニ於テ臘虎并臚轔獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三百七十三條ニ照シテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

但農商務卿ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニアラス

右奉 勅旨布告候事

第九十八 明治十三年九月廿七日第四十號布告ノ内

酒造稅則

第四章 罰令

第二十九條 免許鑑札ヲ受ケスシテ製造シタル者ハ其酒類及ヒ製造諸器械共沒收シ免許稅額ニ倍ノ金額ヲ科シ之ヲ賣捌キタル者ハ其石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ併セ科スベシ

但シ本文酒類並ニ諸器械ヲ己ニ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スベシ

第三十一條 酒類石數ノ檢査ヲ受ケスシテ之ヲ賣捌キ又ハ貸與讓與シタル者ハ其代價ヲ追徴シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ科スベシ

但シ第二十一條但書ノ場合ニ於テハ此限リニ非ス

第三十六條 第十條第二項第二十一條第二十二條第二十三條第二項ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ其製造酒類ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スベシ
但第二十三條第二項ノ酒類ハ總石數ヲ沒收ス

第九十九 明治十六年八月廿日水戸始審裁判所檢事ヨリ司法省へ請訓ノ内

第一條 酒造稅則第三十一條及第三十六條中賣捌代金追徵ノ明文有之右追徵金ハ本犯已ニ之ヲ費消シ完納スル能ハサルハ其資力取調ノ上身代限ノ處分ニ及フヘキ哉

○右内訓 十六年九月十八日

第一條 本犯既ニ追徵スヘキ金額ヲ費消シ完納スル能ハサルハ檢事ヨリ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スヘシ

【第百】 明治十三年九月廿七日第四十號布告ノ内

酒造稅則附則

第八條 第一條第三條第四條第五條ヲ犯シタル者ハ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵スヘシ

【第百一】 明治十三年九月廿七日第四十一號布告ノ内

醫藥營業稅則

第二章 禁令 罰令

第十三條 第十二條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵スヘシ

【第百二】 明治十五年十二月廿七日第六十三號布告ノ内

煙草稅則

第七章 罰則

第三十四條 營業鑑札ヲ受ケスシテ煙草營業ヲ爲ス者ハ營業稅通脫ニ係ル金高三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ煙草ヲ沒收シ之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス

第三十五條 煙草營業者ニシテ無印紙又ハ不足印紙ノ刻煙草ヲ所持

シ又ハ賣渡シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其賣渡代價ヲ追徴ス之ヲ貸與讓與シタル者モ同ク其罪ヲ論ス

第三十八條 第六條第十四條第十五條第二十一條第二十四條ニ違犯シタル者及第二十三條ニ違犯シテ帳簿ノ調製ヲ怠ル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル煙草ハ之ヲ沒収シ之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

〔第三百三〕 明治六年三月十三日第一百一號布告ノ内

鐵道犯罪罰例

第十二條 鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照ラシ罰ヲ科スルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコアルヘシ但シ其償金ノ追徴モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

〔第三百四〕 明治十六年十二月廿八日第五十號布告ノ内

古物商取締條例

第二十一條 此條例ヲ犯シテ買取リ又ハ交換シタル物品贓物ニ係ルモノハ營業者ニ依ルト否トヲ問ハス警察官ニ於テ之ヲ追徴シテ被害者ニ還付スヘシ若シ被害者知レサルトキハ之ヲ領置シ一年ノ後官歿ス

〔第四款解〕 本款載スル所ハ皆ナ之レ贓金追徴ニ關スルモノニシテ別ニ解明セズ而シテ贓金追徴ノ條件ナルモ第三編ニ載スルアリ

○第五章 追 訴

○第一節 追 訴

〔第三百五〕 明治六年七月十七日第二百五十二號布告

負債者身代限ニ遭フ節其者へ對シ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ノ分處置振左之通被定候條此旨相達候事

第一條

貸金穀又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ニ訴出ルヲ許サ、ル規則ナレモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルヲ得ヘシ

第二條

定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ルヲ得ヘシ

第三條

請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ケ尙ホ

不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人證人ニ掛リ之ヲ訴ルヲ得ヘシ

第四條

身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スルモ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス

第五條

負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之レヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ求ムルヲ得ヘカラス

第六條

定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ

者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル債主ハ右動不動産ヲ身代限
ノ糶賣ヲ爲スニ付已レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルヲ得ヘキ而已ニ
テ糶賣ヲ爲スヲ拒ムヲ得可ラス

第七條

動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金ノ内ニテ元金
高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ヲ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高
ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ
從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配スヘキ金高ヲ引渡ス可シ

第八條

引當又ハ質物ヲ取置カサル金數ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ
元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金
高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ

從ヒ處分ヲ爲スヘシ

第百六 明治十七年二月廿九日兵庫縣ヨリ司法省ヘ伺

官金拜借主他債ノ爲メ身代限ノ處分ヲ受クルトキ追訴之儀ニ付明治
十五年二月四日太政官第十二號御達有之候處右第一項用紙ハ通常公
文用紙ニナスト雖モ其書式ハ従前ノ通訴答文例ニ據リ可認儀ト被存
候得共爲念此段相伺候也

○指令 十七年三月十日(電報)

追訴書式ノ儀ニ付伺ノ趣ハ訴答文例ニ據ルヲ要セス

第百六解 十五年太政官第十二號達ハ 第六十二ニ載ス宜シク

引用スヘシ

第一節解 第百五ハ追訴ノ法ヲ定メラレタルモノニシテ法文綴

密ナルニハ別ニ茲ニ解明ヲ要セズ

身代限揭示ノ事ニ關スル
第四十八 第四十九ハ本節ニモ通用ス
ベキモノナリ又々請人證人辨償規則ニ關スル
第三十亦々本節ニ通用ス共ニ就テ參照スベシ

第一節餘解 十四年第八十三號布告ヲ以テ治安裁判所始審裁判所ノ權限ヲ定メラレタレトモ身代限分配加入ノ訴件ハ金額ノ多寡ニ拘ハラズ(權限ニ外ル、トモ) 第四十九ニ示ス所ノ身代限揭示ヲ爲シタル裁判所(身代限ノ所分ヲ爲シタル裁判所ナリ)ニ之レヲ爲シ同裁判所ニ於テ受理セラル、モノナリ若シモ分配加入ノ訴件ニ對シ裁判所カ裁判スベキモノナルトキナラハ十四年八十三號布告ノ權限ニ依リ相當ノ管轄裁判所ニ送リテ裁判セシメ然ル后其分配ハ身代限ヲ爲シタル裁判所ニ於テ爲スベキモノナルベシ

○第二節 追訴セズシテ効ヲ有スル者

第七百七 明治八年四月十日第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戶長役場ノ帳簿ニ記載シテ契書割印モ之レアル公正ノ證書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戶長役場ニ預ケ置キ後日願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

第七百七解 前節ニモ其法律ヲ掲載スル如ク身代限財産糶賣金ノ分配ヲ得ント欲セハ揭示ノ日限中ニ追訴セズンハアルベカラザ

ルモノナリ然レドモ公證記名ノ物件ハ素ヨリ戸長役場ノ簿面ニ於テ万相違ナキモノナレバ之レヲ尋常ノ私約ト同一視スベカラズ故ニ公證記名ノ物件ニ限り追訴セズトモ先取特權ノ効ヲ失セザルモノトセラレタリ

第五十八ノ解ハ本節ト關係アルモノナルユヘ宜シク相互ニ參看スベシ

○第六章 僧侶及社寺身代限

【第八】 明治十年五月十六日第四十三號布告

神社並寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ル、トキ若クハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地所除稅地ヲ除クノ外建物什器寶物古文書類ヲ除

クノ外等ヲ抵當トナストキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令右ノ抵當アルモ其効ナキモノト爲スヘシ此旨布告候事

【第九】 明治十七年六月廿四日山梨縣ヨリ司法省ヘ伺

寺院ニ於テ其寺院用ノ爲メ金穀ヲ負債シ期限ニ到ルモ返償ナラス竟ニ訴訟ノ末身代限被申付タリ然ルニ寺院身代限財産取調方ハ是迄類例モ無之候得共明治六年第八十八號公布僧侶身代限規則ヲ適用調査候儀ト心得可然哉

若シ神社ニ於テ前項ノ場合ニ遭遇スルハ其財産ハ何等ノ手續ニ據リ調査スヘキ儀ニ候哉

○指令 十七年七月九日

伺ノ趣社寺身代限ニ付財産取調ノ手續ハ通常ノ規則ニ準ス可ク其抵償トシテ差押ヲ可ラサル物件ハ左ノ通り心得可シ

一 神体佛像及ヒ其附属物

二 社寺付除税地

三 寶物古文書類

但別段ノ由緒アル地所建物ハ本文ニ準ス

四 特別ノ契約アル寄附物

五 祭祀法用ニ必要ナル建物及ヒ什物

〔第一百十一〕明治六年三月五日第八十八號布告

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相違候事

僧侶身代限規則

抵償トシテ差押ヲ可ラサル品類

一 食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一 建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等へ建添候トモ榮耀ニ屬スル箇所ハ此限ニアラス

一 寄附帳ニ記載スル部分

一 什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一 法衣 寺主並所化及尼共 各一通宛

一 時服着替共 寺主並所化及尼共 各一通宛

一 夜具 寺主並所化及尼共 各一通宛

一 鍋釜及炊具類各一通
 一 本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等
 其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

【第一百十一】 明治六年三月五日第八十九號布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什
 擅家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必用ナ★分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部
 分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ
 置可申候

一 寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分
 ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ
 一 什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ
 一 右二帳二部ツ、相綴リ擅家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長検査ノ

上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部ハ其寺院
 ニ藏シ置ク可シ

【本章解】 社寺又ハ侶僧ノ身代限ト雖モ通常人民ノ身代限ト異ナ
 ル所ナキユヘ本編中第一章乃至第五章ハ本章ニ通用スベキモノ
 ナリ只タ抵償トシテ差押フ可カラザル物件ニ聊カ相違アルノミ
 僧侶ノ身代限ニ際シテハ【第一百十一】ノ如ク社寺ノ身代限ニ際シテ
 ハ【第九】ノ指令ノ如ク通常人民ノ差押フ可カラザル物件ト聊
 カ異ナルモノアリ佗ハ同一ナルヲ以テ敢テ今茲ニ贅解ヲ爲スヲ
 要セズ

○第七章 身代限者權利ノ欠闕

〔本章解〕 身代限ノ處分ニ遭フタル者ハ其ノ權利ヲ失スル
ヤ膏ニ財産上ノミニ止ラズシテ人身上ニモ及ボス少シト
セズ依テ一々之レヲ掲載スルニ暇アラザルヲ以テ左ニ之
レヲ四節ニ分チ其著キモノ一二ヲ載セ他ハ畧シテ餘解ニ
其ノ理由ヲ示サントス

○第一節 官吏

〔第一百十二〕 明治十七年十二月廿六日第百二號達ノ内

判事登用規則

第三條 左ニ掲クル者ハ登用スルコトヲ得ス
一身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者
〔本節餘解〕 官吏ノ登用ニ於ケルハ膏ニ判事ニ限ルニアラズ上ハ
勅任官ヨリ下等外吏ニ至ルマデ凡ソ身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ

辨償ヲ終ヘサル者ハ登用セラル、
採用セラル、者ノ如キハ其則ニ明文モアルベケレドモ由シ明文
アラズトモ履歷書中ニ身代限云々ヲ見ルニ至レバ佗ハ合格スレ
ドモ不適當ノ者ト看做サル、ヤ必セリ然レドモ傭吏ノ如キハ或
ハ採用セラル、者モアルベキ乎

○第二節 投票ヲ以テ撰舉セラル、者

〔第一百十三〕 明治十三年四月八日第十五號布告ノ内

府縣會規則

第二章 撰舉

第十三條 府縣ノ議員タルヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニ
シテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租

拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但左ノ各款ニ觸ル、者ハ議員タルコトヲ得ス

第三款 身代限ノ處分ヲ受ク負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第十四條 議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其郡區内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ル、者ハ選舉人タルコトヲ得ス

〔第一百十四〕 明治十七年五月七日第十四號布告ノ内

區町村會法

第九條 議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款ニ觸ル、者及陸海軍々人現役ノ

者ハ選舉人タルコトヲ得ス

第十條 議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第四款ニ觸ル、者ハ議員タルコトヲ得ス

〔第一百十五〕 明治十七年五月七日内務省乙第二十四號達

本年第四十一號公達ニ依リ町村人民ヲシテ戶長ヲ選舉セシムルトキハ其選舉方ハ區町村會議員撰擧ノ例ニ照準ス可シ此旨相達候事

〔本節餘解〕 今茲ニハ府縣會議員區町村會議員戶長ノ撰擧ニカ、ルモノヲ示シタルマデナレドモ其他衛生委員ニ於ケル檀家惣代ニ於ケル氏子惣代ニ於ケル村惣代ニ於ケル等凡ソ公共ノ代理者トナリテ事ヲ處スルノ任ヲ帶ブルニ適當スベキ者ニハ身代限ノ

處分ヲ受ケテ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者ヲ撰舉スルハ不當ナリト
謂フ可シ

○第三節 學校教員生徒

第一百十六 明治十四年一月廿九日文部省第二號達ノ内

學務委員薦舉規則起草心得

第一條 學務委員ノ被薦舉人及薦舉人タルヲ得ヘキ者ハ年齡滿二十
年以上ノ男子ニシテ其學區内ニ於テ土地若クハ建物ヲ有シ且本籍
ヲ定メテ現ニ居住スル者ニ限ルヘシ但左ノ第一第二第三第四第五
ノ一款若クハ數款ニ觸ル、者ハ被薦舉人タルヲ得ス又第一第二第
三第四ノ一款若クハ數款ニ觸ル、者ハ薦舉人タルヲ得ス
第四款 身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

第一百十七 明治十四年七月二十一日文部省第二十六號達ノ内

學校教員品行檢定規則

第一條 學校教員ノ品行ハ左ノ一款若クハ數款ニ觸ル、者ヲ以テ品
行不正ト認ムヘシ

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

本節餘解

右ノ外工部ノ學校ニ於ケル農商務ノ學校ニ於ケル陸
軍ノ學校ニ於ケル海軍ノ學校ニ於ケル司法ノ學校ニ於ケル文部
ノ學校ニ於ケル府縣ノ學校ニ於ケル是等ノ教員タルモノハ必ズ
第一百十七 二依ルベキモノナルベク又タ生徒ノ如キモ其校ヲ卒業
シテ直チニ官職ニ從事スベキモノハ是亦タ身代限者ヲ入校セシ
ムル可カラザルモノナルベシ現ニ入校ノ規則ニ其制限ヲ明示セ
シモノモ少ナカラザルナリ

○第四節 代理者

〔第一百十八〕明治十八年五月十三日司法省甲第一號布達ノ内

代理人規則

第一款 總則

第四條 代理人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

二 身代限リノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘザル者

〔第一百十九〕明治十七年一月廿四日第一號布達

明治十三年五月司法省甲第二號布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ズ代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所

ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ

〔本節餘解〕

人ノ權義ノ委任ヲ受ケテ之レガ代理者タル者ハ啻ニ

代理人詞訟代人ノミナラズ物理部理ノ代人ニ於ケル刑事ノ代人

ニ於ケル辨護人ニ於ケル財産管理人ニ於ケル後見人ニ於ケル民

事擔當人ニ於ケル其他斯クニ類スルモノハ皆ナ之レ身上權ナリ

財産權ナリノ委託ヲ受クルモノナルユヘ身代限ノ處分ヲ受ケテ

未タ負債ノ辨償ヲ終ヘザル者ニ委ヌル理ナク委テラル、モ受ク

ル譯ナク又タ公ケニ於テ許ス可キモノニハ非ザルベキナリ

其他地所家屋ヲ有スルモノトカ或ハ若干ノ財産ヲ保證トシテ差

出スモノトカ若干ノ身元金ヲ出スベキモノトカ身元引受人ト爲

ルベキモノトカノ定メアルモノ亦タ同一ノモノナルベシ既ニ身

代限ノ處分ニ遭フトキハ一ノ財産ヲモ剩餘スベキモノニ非ザレ

ハ其是等ニ不相當ナル素ヨリ論ヲ俟タサルナリ

○第八章 期滿得免ノ摘要

〔本章解〕出訴期限ハ身代限ニ直接ノ感少ナシト雖モ間接
上甚タ關係多キモノナルユヘ茲ニ純然タル民事ノ出訴期
限ト刑事私訴ノ期滿免除トノ要ヲ摘ミテ掲ゲンノミ

○第一節 民事出訴期限

〔第二百一十〕明治六年十一月五日第三百六十二號布告ノ内

出訴期限規則

第一條

一 學藝ノ授業料

一 旅籠料

一 運送費

一 飲食料

一 手附金

一 商人互ノ賣掛代金

一 職人ノ手間代金

一 日雇人ノ給料

一 請負金

一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等

一 男女藝者ノ揚代金

右ハ六ヶ月限

第二條

- 一 醫師ノ診診及ヒ藥料
 - 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
 - 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
 - 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借貸
- 一 小作米金
- 一 證據金
- 一 敷金

- 一 物品ノ借貸又ハ損料
 - 一 養育料
 - 一 一七ヶ年期マテノ奉公人給料
 - 一 期限ナキ年金及ヒ生涯ノ年金
- 右ハ五ヶ年限

第四條

一條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第百二十一 明治十八年一月廿日第六號布告

民法裁判上負債主失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左之通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所へ訴出ツ可キ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届ケ出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊問シタル上債主差出シタル證書ニ負債者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書證書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又

ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

〔第二百二十二〕明治十五年五月十日第二十二號布告

課税ニ關スル處分ニ就キ不服アリテ出訴セントスル者ハ先ツ其旨ヲ申立課額ヲ上納シ領収證書ヲ添へ其翌日ヨリ六十日内ニ訴出ツヘシ但納税期限前ニ訴出テ訴訟中ト雖モ其期限ニ至レハ課額ヲ上納スヘシ

右奉 勅旨布告候事

〔第二百二十三〕明治十五年十二月廿八日第七十四號布告

備荒儲蓄金及區町村會若クハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ニ關シ不服アリテ出訴セントスルモノハ都テ明治十五年五月第貳拾貳號布告ニ依ルヘシ

右奉 勅旨布告候事

〔第二百二十四〕 明治十六年八月八日第三十一號布告

徵發令ニ依リ負擔ス可キ費用ノ怠納者ハ明治十年十一月第七十九號布告ニ依リ處分ス可シ但財産公賣ノ際買受望人ナキトキハ徵發區ニ没入シ不足金アルトキハ其區ノ損失ニ歸ス

右費用ニ關スル處分ニ就キ不服アル者ハ明治十五年五月第貳拾貳號布告ニ依ル可シ

右奉 勅旨布告候事

〔第二百二十五〕 明治十七年七月四日第二十三號布告

區町村會ニ於テ評決シタル區町村費ニ關シ不服アリテ出訴セントスルモノハ都テ明治十五年(五月)第貳拾貳號布告ニ依ルベシ

右奉 勅旨布告候事

〔第二百二十六〕 明治十六年十月一日千葉縣ヨリ司法省ヘ伺

町村會ニ於テ評決シタル費用ノ怠納者アルキハ土木費ヲ除ク外總テ其施行者ヨリ裁判所ヘ訴出ヘキ筈ニ候處右ハ貸借賣買等人民相互ノ取引トハ同シカラサルニ付訴ノ期限無之儀ト相心得可然哉此段相伺候也

○指令 十六年十月十三日

伺之通

〔第二百二十七〕 明治十七年三月三日和歌山縣ヨリ司法省ヘ伺

町村會ニ於テ評決シタル費用怠納者ニ關スル出訴期限ノ儀ニ付客年十月一日付千葉縣伺ニ對シ同月十三日御指令ノ趣ニ依レハ出訴ノ期限無之儀ニ候處區町村會法頒布以前即明治十二年以前ニ係ル町村教育費ヲ怠納スル者ノ如キハ町村會ニ於テ評決シタル費用同様出訴期

限無之儀ト相心得可然哉

○指令 十七年三月十二日
伺之通

〔第一節解〕出訴期限ニ關スル法律及ヒ令訓等少シトセザレトモ
一々之レヲ載スルハ本書ノ主旨ニ非ザルヲ以テ只ダ參考ノタメ
四五ノ條件ヲ載セタルノミ

○第二節 公訴附帶私訴ノ期滿免除

〔第二百二十八〕治罪法第一編ノ内

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス
一 被害者ノ棄權又ハ私和
二 確定裁判

三期滿免除

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害無能力ナル時又ハ民事裁判所
ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス
公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ
例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯
罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨ
リ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期
限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付
テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審公判ノ手續ヲ止

メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一
條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラス

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ
屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ効ナカル可シ但裁
判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

○第一編附錄 會社鎖店

第一編附錄解 我邦未タ商法ノ頒布ナキヲ以テ商人會社
等ノ分散倒産ニ關スル法律アルヲナシ依テ編者ハ二三會
社ニ關スル鎖店ノ類ヲ聚メ之レヲ第一編ノ附錄ト爲ス佗
日商法ノ頒布セラル、ニ遭ヒ此ノ附錄ヲ不用ニ屬セン

ハ編者ノ敢テ切望スル所ナリ

○第一節 銀行

第二百二十九 明治九年八月一日第百六號布告ノ内

國立銀行條例

第六十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ニ於テ預リ金ノ返濟又ハ爲換手
形約束手形等ノ仕拂ヲナスニ當リ兼テ積置キタル準備金ヲ以テ之
ヲ償フコト能ハサルトキハ其銀行ノ株主等ハ各其所持ノ株數ニ應
シ別ニ出金シテ一時之ヲ償辨スルノ責ニ任スヘシ但此出金ハ全ク
一時辨償ノ爲メニシテ其株金ト異ナルヲ以テ其銀行ハ速カニ之レ
ヲ各株主ヘ返辨スヘシ

第十二章 官命鎖店ノ場合特別監督役跡引受人等ノ取扱方
並ニ公債證書ノ沒入及ヒ紙幣引換等ノ手續ヲ明

カニス

第九十三條 國立銀行ニ於テ左ニ掲クル事實アルキハ大藏卿ハ鎖店ヲ命スルコトアルヘシ

第一 國立銀行條例ノ旨趣又ハ箇條ニ背戾シ大藏卿其銀行ヲ鎖店セシムルヲ相當ナリト思考スルトキ

第二 國立銀行ニ於テ負債辨償ノ義務ヲ盡ス能ハサル證據アルトキ

第三 國立銀行ニ於テ其資本金總額十分ノ五以上ノ損失ヲ生スルトキ

第九十四條 前條ニ記載スル事實アリト認ムルトキハ大藏卿ハ檢査ノ官員ヲ派遣シ其事實ヲ推糺セシメ若シ相違ナキニ於テハ都テ其銀行ノ營業ヲ差止メ金銀其他ノ出納ヲ禁スヘシ

第九十五條 前條ノ如ク營業ヲ差止メラレタル銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員ハ諸手形諸證類又ハ抵當物地所等ヲ他人ヘ譲リ渡シ又ハ賣渡スヘカラス又他人ヨリ金銀其他ノ物件ヲ預ルヘカラス若シ頭取取締役支配人其他ノ役員等此箇條ニ背キ或ハ譲リ渡シ又ハ賣渡シ又ハ預リ又ハ拂方ノ引受ヲナスコトアルニ於テハ紙幣頭ハ督促シテ其金額ヲ償ハシメ之ヲ其元ニ復セシムヘシ

第九十六條 紙幣頭ハ更ニ大藏卿ヘ稟議シ特例ノ監督役ヲ命遣シ其銀行ノ實際諸般ノ取扱ヲ推究シテ其事實ヲ詳明ニ報知セシムヘシ而シテ其背戾ノ事實相違ナキニ於テハ紙幣頭ハ其銀行ヨリ出納寮ニ預ケ置キタル公債證書ヲ没入スヘキ旨ヲ(右報知ヲ得タル日ヨリ三十日以内ニ)申渡シ其公債證書ヲ取上クヘシ

第九十七條 右諸般ノ手續了リシ後チ紙幣頭ハ大藏卿ヘノ稟議ヲ經

テ凡ソ此銀行ノ紙幣ヲ所持スル者ハ都テ之ヲ大藏省ニ出シテ其引換ヲ乞フヘキ旨ヲ公告シ相當ノ時日ヲ以テ之ヲ引換遣ハスヘシ而シテ其引換タル紙幣ハ總テ此條例第五十一條ノ手續ニ從ヒ之ヲ燒捨テ其趣ヲ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告スヘシ

第九十八條 此條例第九十六條ニ據リ其銀行ヨリ没入シタル公債證書ハ大藏省ノ便宜ニ從ヒ之ヲ公賣若クハ私賣シ以テ其銀行ノ發行紙幣引換ノ資ニ充ルモノトス但右公債證書ノ賣却代價紙幣下付高ニ對シ不足アルトキハ大藏卿ハ佗ノ債主ニ先チ之ヲ其銀行ノ資産ヨリ徵収シ若シ下付高ニ對シ過剩アルトキハ之ヲ其銀行ニ下付スヘシ

第九十九條 此條例第九十六條ニ掲クル所ノ特例監督役ノ報知ヲ得之カ處分ヲ爲スニ於テハ紙幣頭ハ即チ右銀行ノ跡引受人ヲ命ジ其

銀行ノ諸簿冊及ヒ各種ノ資産等ヲ取押ヘ諸貸付金立替金ヲ取立タル上ニテ其裁判所又ハ府縣ノ聽斷主任官員ニ謀リテ滯リ貸金額及ヒ銀行ノ所有物ヲ賣拂ヒ其集合金ヲ以テ其銀行ノ諸借財又ハ預リ金其外ヲ償却シ過金アレハ株高ニ應シテ之ヲ株主ヘ割返シ不足アレハ都テ銀行ノ株高及ヒ其所有物ヲ限リテ相當ノ分散ヲナサシムヘシ

第一百條 右借財又ハ預リ金等ヲ償却スルニハ紙幣頭ヨリ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ三箇月間世上ニ公告シ其銀行ニ貸金預ケ金等アル者ハ右時限中ニ申出テシメ其事由ト證書類トヲ檢按シ紙幣頭ハ厚ク之ニ注意シ適正ノ處分ヲ以テ貸方ニ賦當償却スヘシ

第一百一條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ノ株主等ハ假令其銀行ニ損失又ハ其他ノ事故アリテ其銀行鎖店分散スルコトアルモ其株主等ハ其

創立證書ニ於テ掲載シタル株式金額ノミチ損失スルノ外其鎖店分
散ニ付テ別ニ賦當出金ヲ受クルノ責メ勿カルヘシ

第二百二條 紙幣頭ハ此條例第九十六條ニ掲クル所ノ處分ヲ爲スニ際
シ其銀行ヨリ尙ホ請願スルコアリテ其狀實ヲ具陳スル時ハ監督役
ヲ出セシ日ヨリ三十日以内郵便遞送日數ヲ除クナラハ其地方官廳
ニ謀リ更ニ其實況ヲ詳悉シテ全ク其背戻セサルノ實證アルニ於テ
ハ紙幣頭ハ之ヲ大藏卿へ稟議シ而シテ之ヲ宥恕スヘシ尤右ノ請願
書ハ必ス其地方官廳ヲ經テ之ヲ紙幣頭ニ差出スヘシ

但シ此宥恕ヲナス時ハ紙幣頭ハ速カニ其趣ヲ出張ノ監督役ニ達
シテ暫ラク其處置ニ取掛コテ見合セシムヘシ

第二百三條 此條例ヲ遵奉スル銀行鎖店ノ場合ニ於テ跡引受人ノ入費
等ハ總テ相當ノ處分ヲ以テ大藏卿之ヲ取極メ他ノ債ニ先チ其銀行

ノ資産ヨリ之ヲ辨償セシムヘシ

第十三章 銀行平穩鎖店ノ手續及其紙幣引換方等ノ事ヲ明

カニス

第四百四條 此條例ヲ遵奉スル銀行三分二以上ノ株主等ノ協議ニ從テ
平穩ニ分散又ハ鎖店セントスルニハ其銀行ノ頭取支配人ヨリ其銀
行ノ名印ヲ以テ其決議ノ旨趣ヲ紙幣頭ニ申牒シ其承認ヲ得テ後チ
三箇月間新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告シ發行紙幣ノ引換方
其他銀行ニ屬スル取引ノ清算ヲ詳載シタル報告ヲ製シテ之ヲ世上
ニ公告スヘシ

第四百五條 右ノ公告ヲ爲シタル日ヨリ其銀行ハ其引換ヘタル銀行紙
幣ヲ以テ豫テ出納寮ニ預ク置キタル公債證書ノ内ヲ取戻スコトヲ得
ヘシ尤其公告ノ日ヨリ半箇年ヲ過キ其銀行ノ簿冊上ニ於テ尙ホ世